

Fate/Grand Order —
RE:BUILD—

(TWT)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球。

宇宙稀にみる命の溢れる星。

その星は知性を進化させた人類によって支配され、人間は文明を築き、歴史を紡ぐ。文明の核たる社会は人間の手で構築されていたが、世界の真理を握っていたのは魔術師と呼ばれる人間たちだった。

そんな魔術師たちはある時、人類の破滅の未来を観測する。

確定した破滅の未来を変えるため、魔術師たちはある儀式をもって過去への介入を決意する。

その名を聖杯探索『グランドオーダー』。

魔術師主導のこの一大プロジェクトに想定外の科学要素が加わった。

明日の地球を投げ出せないから、どんなに強大な敵とでも戦い続けた者。

未来へ繋ぐため、過去をいたわるため、現代いまを守り続けた者。

愛と平和を胸に生きていける世界のために、命を懸けた者。

その者は「仮面ライダー」と呼ばれた。

「さあ、実験を始めようか？」

注意事項

本作は「TYPE—MOON」製作の Fate／Grand Order（以下FGO）と「石ノ森章太郎」原作の仮面ライダービルド（以下ビルド）のクロスオーバー作品となります。

作者はFGOプレイヤーであり、ビルド本編視聴済みではありますが、本作品においては両作品に対する多大な独自解釈が含まれます。そのため原作の設定とに矛盾が生じる可能性があります。

また作者がビルドをメインに据えたいがため、仮面ライダーを鼻糞した描写が多く含まれます。

以上のことを容認できない方、気分を害される方は本作品の閲覧をお勧めいたしません。

問題ない。

仮面ライダー大好き。

FGOも大好き。

以上に当てはまる方はよろしくお付き合い下さい。

仮面ライダービルド完結おめでとう！

目次

新世界へ	Aパート	1
新世界へ	Bパート	8
新世界へ	Cパート	26
特異点F	O1A	36
特異点F	O1B	51
特異点F	O1C	80
特異点F	O1D	107
特異点F	O1E	134
特異点F	O1F	161

新世界へ Aパート

「愛と平和を胸に生きていける世界を創る……そのために俺は戦う！」

緋色の装甲を纏った戦士が叫ぶ。

「破壊こそ力だ！ お前の正義など俺が壊してやる！」

相対する星喰の化物が応えるように吠える。

星を護るため。星を喰らうため。

破壊が約束された地で、二人の死闘は続く。

そしてついに決着の時が――

「これで最後だッ！」

赤と青の装甲にその身を変えた戦士が渾身のキックを上空から化物に叩き込み、そのまま戦士と化物は一直線に地面へと落下していく。

「この俺が、滅びるだと……そんなことがあつてたまるか！」

化物は自らに纏まり付く滅びの気配を振り払い、自身の腹に打ち込まれた戦士の足を掴み直す。

「消滅こそ宇宙の真理！ 破壊こそ究極の力だ！ 破壊の化身たる俺が滅びるわけがあ

るものかッ！」

掴んだ戦士の足を僅かに押し戻し、化物はそのまま足を外そうとする。そうはさせまいと戦士は残る力の全てを足に込める。

既に二人のいるその地は崩壊寸前だった。

星ならざるその場所は、地面も空もあちこちがまるでひび割れて剥がれたペンキのようにはボロボロと崩れ去っては虚空に消える。そしてその後には何も無い真つ暗な空間だけが残る。

そんな中を両者は勢いを増しながら空中を流れ落ちていく。

そして二人が地面に落下したその瞬間、その空間は崩壊を迎えた。

赤と青の光が溢れ出し、全てが閃光に塗りつぶされる。

目も開けていられない程の閃光の中、戦士の意識もまた光に飲み込まれた。

暗転していく戦士の脳裏に大切な仲間たちが浮かぶ。

(万丈……美空……紗羽さん……カズミン……幻さん………父さん)

何も見えず、何も感じなくなっていく。手放しそうになる意識を手繰り寄せる様に戦士は手を伸ばす。見えない何かをつかみ取るうとして。

「新世界………創………」

それを最後に戦士の意識は途切れた。

「フオウ……」

何か聞いてきた。

それを切欠に男の意識が泥のように重たい倦怠感から少しだけ持ち上がる。

しかし、疲れ切った体は鉛のように重く、瞼も開く気配がない。男の意識は覚醒することなく、再び倦怠という泥の中へと――

「キュウ？」

また聞こえた。

今度は先ほどよりもはっきりと。何か、動物の鳴き声のような――

そして再び男の意識が少しだけ持ち上がる。

だがそれは聞こえてくる鳴き声のためじゃない。

それは切欠に過ぎず、もつと他の何か。とても大切な何かが自分の中で反響し続けているからだ。しかしそれが何だったのか、頭の中に靄がかかって思い出せない。

もう少し意識がはつきりすれば、他に何か刺激があれば。

「フオ」

三度の鳴き声と共に、今度は頬を舐められたような生暖かい感触を感じた。そしてそれが触覚というセンサーに新たな情報を入力することとなる。男の意識はスイッチを

入れたパソコンのように急速に立ち上がる。

そうだ、思い出した。

眠りかけている場合ではなかった！

「ッ！」

「わわッ！」

ガバツと身を起こした男の、いや青年の目の前には眼鏡をかけた小柄な少女の驚いた顔があった。

整った顔立ち、淡色の髪とそれに見え隠れする瞳。儂げな印象の少女をほとんどの人間は美少女だと称えるだろう。傍らには犬ともリスともにつかない小動物が同じく驚いた様子で男を見上げている。

だが、青年はそれどころではないといった様子でしきりにあたりを観察していた。

床、天井、壁と見回し、次いで壁に埋め込まれた大型の窓の外の景色に目が留まる。はじける様に窓にへばり付くとマジマジと外を見て呟いた。

「……雪だ」

窓の外には見たことのない程の吹雪が吹き荒れている。それが青年の混乱を一層激しいものにした。

「(冬でもないのに吹雪? ここは北都か? いやそれよりもここはどこだ? 何の施

設だ？ いやいやそれよりもここは新世界なのか？ 上手くいったのか？ いやいやいや」

途中から口から独り言が零れていることに気が付かないまま青年は頭を掻き筆る。常日頃から天才と自負する頭脳も情報不足ではただ空回るだけであった。

「……あの人は一体どうしてしまったのでしょうかフオウさん？」

「フオウ……」

そんな男の様子に困惑する少女。彼女は足元のフオウと呼んだ小動物を追いかけて来たところで倒れていた青年とその隣に寄り添うフオウを見つけたのだった。

「マシユ。ようやく見つけたよ」

「レフ教授」

「あまり一人で出歩かないようにと……どうかしたかい？」

そこへ通路の向こうから緑色のスーツにシルクハットを被ったレフ教授と呼ばれた男がやって来た。レフは少女、マシユに何かを伝えようとしたところで窓に張り付いている青年に気がついた。

頭を掻き筆っている青年を見つめるレフは固まったように微動だにしない。

「……クツ」

レフの様子を背中越しに見ていたマシユはレフが微かに笑ったように感じた。

「……レフ教授？」

「ん？ ああ、マシユ。彼は誰だい？ 見たところ制服も来ていないようだし、部外者がここにいるはずがないのだけどね」

振り向いたレフはマシユが知っている、絶えず微笑んでいるいつものレフ・ライノールだった。レフに感じた僅かな違和感も元々そこまで親密でもないマシユにとつてはわざわざ追及するものでもなかった。

「いえ、私も知らないのです。ここに倒れていたのを見つけただけです」

「ふむ……」

レフが手元の端末を操作すると目の前の青年の顔写真と共に名前が検索された。

桐生戦兎。

マスターNo. 48。

出身地：

経歴：

家系：

「名前……きりゆうせん……漢字か。アジア圏の人間かな？ しかしこれは名前と役職以外白紙のままだ。よほど急いでいたのか、人事部の怠慢か……いずれにせよ所長にバレたら大目玉だな」

自分には関係ないからいいかといった様子のレフの隣で、マシユは小さく呟いた。

「桐生、戦兎……」

それが自分以外にフオウが懐いた二人目の名前。

「いやいやいやいやいや。まずは落ち着こう」

一方の戦兎当人はとうとうやくやく少し落ち着いた様子だった。

「そうだ、天才はうろたえない」

いや、落ち着いたつもりになっているだけかもしれない。

「まずは状況確認だ。俺以外の人間の意見を聞く。第三者の視点による評価、実験の基
本だ」

戦兎はここでようやくマシユのほうへと向き直った。少女の傍らにはいつものまにか
緑のシルクハットを被ったレフが増えていたが、戦兎はそんなことはお構いなしにツカ
ツカとマシユの目の前へと進み出る。レフが何か言いたそうにしてはいたが一切無視。
そのままマシユの肩に手をおき、瞳を覗き込むように顔を近づけて。

「ねえ君。ここは俺が創造した新世界？」

新世界へ Bパート

前回の出来事を戦兔君、三行で説明して下さい。

「新世界……創……」

「そうだ、天才はうろたえない」

「ねえ君。ここは俺が創造した新世界？」

—・—

「最悪だ……」
戦兔は誰もいない廊下の真ん中で深いため息をついた。思いだされるのはつい先程のやり取り。

『新世界……ですか？』

『そう！ スカイウォールは!?』

『え、えつと……その……』

『消滅した月は?! 死んだ人たちは?!』

『あー桐生戦兎くん?』

まくしたてる戦兎とその勢いにたじろぐマシユ。それを見かねたのか、レフが二人の間に割って入った。

『申し訳ないが私とマシユはこれからブリーフィングに出席しなければならぬのだよ。君は……とりあえず割り当てられた個室で待機していてくれ。後で医務室に連れて行つてあげるから。ほら、この端末の指示通りにいけば辿りつくから。それでは失礼。行くよマシユ、ほら』

そう言つてマシユを引き剥がし、代わりに端末らしき機械を押し付けたレフはマシユを連れて足早に去つていった。

逃げるように去つていく二人の背中を呆然と見送つた戦兎はそこでようやく自分の言動を振り返つたのだつた。

「あの質問の仕方はないでしょ……完全に頭のおかしい人を見るような目つきだったよ、あの子……」

スカイウォールだの月が消滅したのだと、いくら何でも初対面の人間にする質問ではなかった。マシユと呼ばれていた少女にとっての第一印象は変人で確定だろうなどと、再び大きなため息をつく。

一人取り残された戦兎は手の中の端末に目を落とした。

「とりあえず、言われた通りにしておくか……」

これ以上余計な真似をしたら右も左もわからない状態のままどこかわからない場所に放り出されてしまうかもしれない。それは避けたい。

戦兎は端末のナビゲーションが示す通りに歩き始めた。

「しかしこのウェアラブル端末……凄いな。小さいのにこんなにくつきりした立体投影が出来るなんて……どこの技術だ？」

「はい、入ってまー……つて、うええええええ!!」

見知らぬ施設で戦兔が出会った3人目の人物はナビゲーションの指示した個室に入った先客だった。

「な、なんだ君は！　ここは空き部屋だぞ、僕のさぼり場だぞ!?　誰の断りがあつて入ってくるんだい!」

白衣を纏い、跳ね返った長髪を後ろで一纏めにした男性は食べかけのケーキを手にしたまま戸口に現れた戦兔を指さして驚いている。

驚きたいのは戦兔も同じだったがこの先客はなにやら制服のようなものを着ている上、この施設の勝手も知っている様子だ。この施設の関係者であることは容易に想像できた。

「あの、レフという人にこの部屋で待機してろと言われましてすね……」

「レフがこの部屋を？　つてことは君が最後の適正者？　ああああ……ついにこの隠れ家とお別れかあ……」

何やら勝手に納得して勝手に落ち込んでいるこの男性。

「あの……ところで、あなたは？」

「ああ。僕はここの医療部門のトップ、ロマン・アーキマン。それで君は……」
「桐生戦兎です」

「戦兎君か。僕のこととは是非Dr. ロマンと呼んでくれ。皆その愛称で呼ぶんだけど、僕も気に入っててね。格好いいし、どことなく甘くていい加減な感じがするし。あと敬語もいらナイよ」

柔和な笑みを浮かべる医療部門のトップは自分とさほど歳は変わらないように戦兎には見えた。

「じゃあ俺のことも戦兎で」

「オーケー戦兎。これからよろしく」

「フオウ」

その時、戦兎の足元からひよっこりとフオウが顔を出した。どうやらマシユではなく戦兎についてきていたらしい。

「あれ？ 君の足元にいるの、もしかして噂の怪物？ うわあ、初めて見た！ マシユ

から聞いてはいたけど、本当にいたんだねえ……ほら、お菓子食べるかい？」

「……フウ」

「あ、あれ……今何か凄く哀れなものを見るような目で無視されたような……」

差し出されたケーキ（とロマン）を無視してフオウは戦兎の背中に飛びつき、そのま

ま背中をよじ登って最終的に戦兎の肩に落ち着いた。

戦兎は驚きつつ肩に止まったフォウをマジマジと見つめた。

「それにしても……犬科……いやリス科？　見たことのない生き物だ。装飾品もつけているし、毛並みも良い。誰かのペット？」

そう言いつつ撫でようと伸ばした戦兎の指をフォウが前足で叩き落とした。それなりに気位が高いらしいが、それでも逃げないところを見るとやはり戦兎は気に入られているのかもしれない。

「マシユが世話をしているとは聞いていたけど飼っているわけじゃないらしいよ？　気がついたらこのカルデアにいたらしい」

ロマニの言葉をフォウを見つめながらなんともなしに聞いていた戦兎だが、その中に気になる単語を見つけた。

「カルデア……？」

話の流れからするとこの施設の名前のようなのだが、戦兎は聞いたことのない名前だった。

「あれ、もしかしてカルデアのこと知らない？　戦兎は一般枠のマスターとしてここに来たんだよね？　スカウトされた時に説明されなかった？」

「それが……その、記憶が曖昧で……」

なぜここにいるか、それはむしろこつちが聞きたいくらいだ。その言葉を飲み込むのが精一杯だった戦兎は辛うじてそう答えた。

「うーん……一時的な記憶障害かな？ レイシフト適正を検査する霊子ダイブシミュレーションで脳に負荷がかかったのかも」

ロマニの言葉の意味は理解できなかったが、何やら一人で納得してくれたようだった。

戦兎の事情は説明することが難しい、というよりもまず信じて貰えないだろう。頭のおかしい人間としていきなり医療のトップの前で医務室に放り込まれるのは御免だ。

「今はレイシフトの実験でゴタゴタしているから、ひと段落して落ち着いたら医務室でしっかりと検査しよう」

「ああ。ありがとう」

ここはロマニの言う通り、一時的な記憶喪失ということにしておくことにした。こんなところで二度目の記憶喪失扱いされることになるとは思ひもしなかった戦兎だった。

「せっかくだからカルデアについて教えようか？ これからしばらく過ごすことになる場所だから知っておいたほうがいいだろうし」

それは戦兎にとって願ってもないことだ。戦兎は迷わず首を縦に振る。

「あーでもそれならまずカルデアの紹介ホームページを見たほうが早いかも」

そう言うってロマニは戦兔の持つ端末を操作する。投影された立体映像のページが数回切り替わり、「人理継続保障機関フィニス・カルデア」と書かれたページが現れた。「変な表現だけど、対外向けに作った身内用のホームページ……みたいなものでね。大した情報は掲載されていないけれどカルデアの概要を知る分には十分なはずだ」

ロマニの言葉を待たずに戦兔は食い入るようにページを読み込んでいた。

最初に目に飛び込んできたのはこの施設の正式名称。

人理継続保障機関フィニス・カルデア。

魔術だけでは見えない世界、科学だけでは計れない世界を観測し、人類の決定的な絶滅を防ぐため、人類史を何より強く存続させる尊命の下に魔術・科学の区別なく研究者が集められた特務機関。

「(魔術って……漫画やアニメで出てくる魔法のことか？ それが科学と並んで現実で学問として認知されている……?)」

これだけの情報で戦兔の頭は既に許容値ギリギリだった。しかしページの内容はまだ続いている。戦兔はクラクラする頭を押さえながら読み進める。

西暦1950年、事象記録電脳魔・ラプラス成功。

西暦1990年、疑似地球環境モデル・カルデアス完成。

西暦1999年、近未来観測レンズ・シバ完成。

西暦2004年、守護英霊召喚システム・フェイト完成。

西暦2015年、霊子演算装置・トリスメギストス完成。

ここでついに戦兔は耐えられなくなり画面から顔を離した。

「(魔術の存在も大問題だが……2007年に起きたはずのスカイウォールの惨劇について何も触れていないことも気になる……カルデアの目的がここにあるように人類滅亡を回避することなら何かしらのアクションを起こしそうなものだが……)」

戦兔は意を決してロマニに話しかける。

「なあドクター……2007年に日本で何が起きたか知っているか？」

「2007年に日本で？ いや、特にこれと言って何も起きてないと思うけど……地震か何か？」

「(日本国内に限った事象とはいえ、あれだけの惨劇について何も知らないなんて考え辛……やはりスカイウォールそのものがないとしか……)」

戦兔の表情が一層険しくなる。

やはりここは自分の元いた世界ではない可能性が極めて高い。しかしそうだとしたら今いるこの世界は……

「ど、どうかしたのかい？ 怖い顔をして」

「……あ、ああ。この説明の前提である魔術って何なのかと思つて……」

本当のことは言えず、とつさに戦兔はそう答えたのだが、かえつてロマンは納得した表情を浮かべる。

「ああそうか……戦兔は今まで魔術に縁のない生活を送っていたんだね。いきなり魔術とか言われても混乱するか」

そう言つてロマンは魔術についてかいつまんで説明してくれた。

曰く。

魔術は科学では解明できない過去の人間の技術を司るもの。

反対に科学は魔術では到達できない未来の人類の技術を積み重ねるもの。
曰く。

魔術とは人為的に神秘・奇蹟を再現する行為の総称であり、魔力を用いて「既に世界に定められたルール」を起動・安定させ、神秘を起こす術式である。

また魔術はその現象を知っている者が増えれば増えるほど「知名度」が上がり威力を

増すが、逆に現象の原因を知っている者が増えれば増えるほど「神秘性」が失われて威力が減るため、魔術師は機密主義で一般人に知られることを禁忌とする。

曰く。

曰く。

曰く。

「ざっくり説明するとこんな感じなんだけど……大丈夫？」

「ちよつと、ちよつと待った……頭を整理するから」

戦兎は眩暈がした。

桐生戦兎は物理学者、つまりは科学者だ。科学者にとって魔術、魔法だのはフィクションや創作の中だけのものであり、非現実的で到底信じられるものではない。

それでも戦兎が魔術を頭ごなしに否定しないのは彼自身が超科学的なものと縁深く、様々な体験をしてきたからだ。平衡世界、ゲームによる病、欲望の具現であるメダル、宇宙人、中には靈魂の関係者もいた。しかしその戦兎をしても今のこの状況は容易に飲み込めるものではなかった。

頭を抱える戦兎を見たロマニは励ますように言った。

「そんなに深刻にならなくても大丈夫だよ。このスタッフはみんな優秀だし、君の先輩にあたるマスターたちも他に47人もいるんだ。仮にミッションでミスを犯しても周りがいくらでもフォローしてくれるよ、きつと!」

どうやらロマニは戦兔がここでの生活を心配していると思つたらしい。そこまで言つたところで言つた本人であるロマニがはたと気がついた。

「そういえば戦兔……きみ、ファーストミッションはどうしたの? 何でレイシフトから外されたんだい?」

「ファーストミッション? レイシフト? 何だそれ?」

「何つて……カルデアの最重要任務だよ。そのためにここに来たんだろう?」

聞いたこともない単語に疑問符を浮かべる戦兔。

てつきりわかつているものだと思つていたロマニ。

「えっ?」

二人は揃つて間の抜けた声を上げた。

「僕はてつきり、僕と同じで所長にカミナリを受けてミッションから外されたからレフに自室待機を言い渡されたものだ……」

「だからちよつと待てつて。そもそも俺はその所長に会つたこともないし、マスターが何なのかも分かつてないんだが?」

二人の認識には決定的なズレがある。そのことに気がついたロマニは瞬時に顔を青ざめた。

「レフに言われて来たって言うから気にしなかったけどひよつとして無断欠席なんじゃ……まずいぞ！ 所長は怒りっぱいし、根に持つし、目をつけられたらしばらく何かにつけていびられるかも……」

ロマニが顔を真つ青にしながらそういった瞬間、ロマニのウエアラブル端末から呼び出し音が鳴り響いた。

『ロマニ』

「うわああああ!? って何だレフか。所長かと思つた……」

端末から聞こえてくる声には戦兔も聞き覚えがあつた。マシユと一緒にいた緑のシルク鳩を被つたレフ・ライノールという男のものだ。

『何を驚いているのかはしらないが、あと少しでレイシフト開始だ。万が一に備えてこちらに来てくれないか?』

「何かあつたのかい?」

『Aチームは問題ないがBチーム以下若干の変調がみられる。これは不安だな』
「それは気の毒に。軽い麻酔をかけたほうがいいかな」

『ああ、急いでくれ。今医務室だろ? そこからなら二分で到着できるはずだ』

「え!? あ、ああ……そうだね……」

『遅れるなよ』

そう言つて通信は切れ、あとには気まずそうなロマニが残される。

「ここ、医務室じゃないけど……二分でつくのか?」

「……それを言わないで欲しい……ここからじゃどうやっても五分はかかるぞ……」

レフもまさかロマニが仕事をサボつて医務室を離れているとは思わなかつたらしい。どうやらロマニの遅刻は免れないようだ。しかし、ロマニ本人はさほど気にしていない様子だった。

「まあ、ちよつと位の遅刻は大目に見てもらえるよね。Aチームは問題ないようだし」

それよりも、と戦兎を指す。

「戦兎こそ後々やつてくる所長の特大カミナリを覚悟しておくことだね。所長は怖いぞー。毎日毎日目を合わせるたびに説教されるんだ。目を合わせないようにしていても向こうから説教しにくるんだぞ。ソースは僕の実体験」

「何それ凄い怖い。パワハラじゃないの?」

戦兎の言葉に否定も肯定もせず、ただ、ハハハと乾いた笑みを浮かべるロマニ。

「魔術社会の技術の粋が集められたこのミッシヨンで、平凡な医者 of 僕に何が出来るわけでもないけれど、お呼びとあらば行かないとね。話の途中で申し訳ないけど、僕はこ

れで失礼するよ」

「ああ。色々教えてくれて助かった」

「どういたしまして。この後どうなるかわからないけれど、落ち着いたら医務室を訪ねに来てくれ。今度はお茶とお菓子くらいご馳走するよ」

そう言つてロマニが扉の前に立つた瞬間、唐突に部屋の明かりが落ちた。窓のない部屋は瞬時に暗闇に閉ざされる。

「何だ？ 明かりが消えるなんて何が――」

ロマニの声を遮るように暗闇に重低音が響いた。音からして戦兎達の足元、地下から響いてきたようだ。

戦兎はその音に聞き覚えがあつた。これは爆発物による爆音だ。かつて嫌という程聞いた破壊の音だ。

『緊急事態発生。 緊急事態発生。 中央発電所、および中央管制室で火災が派生しました』

『中央区画の隔壁は90秒後に閉鎖されます。職員は速やかに第二ゲートから退避してください』

『繰り返しします。中央発電所、及び――』

「今のは爆発音か!? モニター、管制室を映してくれ！ 皆は無事なのか!？」

ロマニの要請を受けたカルデア中のモニターを統制する近未来観測レンズ・シバが管制室の映像を映し出す。

映像には燃え盛る施設と瓦礫の山が映し出されていた。唯一無事が確認できるのは宙に浮かんでいる巨大な地球儀のような球体だけだ。

「……戦兎、すぐに避難してくれ。僕は管制室に行く。もうじき隔壁が閉鎖される。その前に君だけでもゲートから外に出るんだ！」

それまでのふわふわした雰囲気を一変させ、毅然とした様子のロマニはそう告げてすぐに部屋から駆け出して行った。

「……最悪だ」

部屋に取り残された戦兎は呟いた。

“ここ”で目を覚ましてからというもの混乱続き。何も分からないままここまで来て、ようやく少しばかり情報を得られたと思えば“魔術”などという予想の斜め上どころか明後日の方向へ吹っ飛んでしまいそうな情報が飛び出してきた。判明した事実以上の謎が発生し、かえって疑問は深まるばかりだ。そんな中、極めつけにこの爆発である。

戦兎のカンが告げている。この爆発はまだ始まりに過ぎない。これ以上首を突つ込めば更に大きな事件に巻き込まれ戻ってこられなくなると。

誰かが戦兎の頭の中で警鐘を鳴らす。

ここはロマニの言う通り避難するべきだ。

何も知らないことがどれだけ危険なことが身を持って知っているはずだ。

自分の置かれている状況が何一つ理解できないまま足を踏み入れるのは自殺行為。

かつて勝手な思い込みだけで動いた自分が何を引き起こしたのかを思い出せ。

それに対して戦兎の心が叫ぶ。

お前は知っているはずだ。

爆音が何を意味するのか。爆発が何をもたらすのか。

何も知らない、何も分らない、そんな自分が行っても何もできないかもしれない。

でもそこにはきつと助けを求める人がいる。

それだけで行く意味はきつとある。

「フオウ……」

戦兎の足元でフオウが小さく鳴いた。どうするのかと、そう問いかけている気がした。

「……正義の味方は辛いよってか」

心は決まった。

戦兔は足元のフオウを拾い上げると部屋を飛び出した。

新世界へ Cパート

そこにはきつと助けをを求める人がいる。

それだけで行く意味はある。

「……正義の味方は辛いよってか」

心は決まった。

戦兎は足元のフオウを拾い上げると部屋を飛び出した。

――

「ドクター!」

「戦兎!?! ゲートはこつちじゃないぞ! まさか、ついて来るつもりかい!?!」

「応急処置の知識くらいはある! 人手は多いほうがいいだろう?」

「そりゃそうだけど……ああもう! 隔壁が閉じる前には戻るんだぞ!」

エスカレーターを下り、階段を降り、二人は走った。やがて一回り大きな扉が見えてきた。その扉を潜った先は開けた巨大なホール状になっていた。

そしてそのホールの中はモニターで見えるよりもはるかに悲惨な状況だった。

「ここが爆発の基点だろう。これは事故なんかじゃない。人為的な破壊工作だ」

ロマニが周囲を確認して言った。

辺り一面は火の海。天井も壁も崩れて瓦礫がそこらに散乱している。

『動力部の停止を確認。発電量が不足しています』

『予備電源への切り替えに異常発生。職員は手動で切り替えてください』

火災の音に交じって事務的な声色のアナウンスが響く。

「……僕は地下の発電所へ行く。カルデアの火を止める訳にはいかない。戦兔は急いできた道に戻るんだ。まだギリギリ間に合う」

アナウンスを聞いたロマニが戦兔に言った。そして念を押すように言葉を続ける。

「……残念だけど生存者はいない。ここにおいても危険なだけだ。いいか、外に出て外部からの救助を待つんだ！ 急いで！」

そう言つてロマニは奥へと走り去った。

残された戦兔は再び眼前に広がる悲劇をみやる。かつて何度も見た悲劇の光景に戦兔は胸が締め付けられた。

ロマニの言う通り生存者の気配はない。しかし、もしかしたら助けを求めている者がいるかもしれない。戦兔は逡巡の後、ホールの一番下へと降りた。

「誰か無事な人はいませんか！ いたら返事をして下さい！」

戦兎の呼び声に応える者はいなかった。それでも戦兎は何度も呼び掛ける。

『システム レイシフト最終段階へ移行します』

『座標 西暦2004年1月30日 日本 冬木』

代わりに戦兎の声に応えたのはまたしても事務的なアナウンスだった。しかし、そのアナウンスの中に戦兎はここに来てから何度も聞いたある単語を拾った。

「レイシフト？」

レフ・ライノールやロマニが散々口にしていた言葉だ。ファーストミッションとやらで行われる予定だったというカルデアの最重要任務。

『ラプラスによる転移保護 成立。 特異点への因子追加枠 確保』

『アンサモンプログラム セット。 マスターは最終調整に入って下さい』

戦兎は猛烈に嫌な予感がした。

言葉の意味は分からないが、明らかに何かのシークエンスが実行されている。そしてそれはこの場にいる人間全てを対象にしているように聞こえた。

「限界か……？」

ここにいたら何かに巻き込まれる。生存者も見つけられない。戦兎は諦めて踵を返そうとした。

「……、あ」

だがそこで戦兎は聞いた、か細い人の声を。戦兎は辺りを見回し、そして大きな瓦礫の下に見覚えのある少女の姿を見つけた。

「あの子は……!?!」

戦兎は駆け寄ろうとして息を呑んだ。

少女、マシユの下半身は大きな瓦礫に押し潰されていたからだ。

「これではもう」

「……しつかり！ 今助けるから」

戦兎は頭によぎる考えを振り払ってマシユの元へと駆け寄った。

「あな、たは……」

「戦兎。桐生戦兎だ。確かマシユだったよね。気をしつかり持って。今何とかする」

「……いいん、です……助からない、から……それより、あなたは早く、逃げて……」

「無理して喋らないで」

戦兎はマシユを押しつぶしている瓦礫を見回した。10メートル以上ありそうなコンクリートの瓦礫だ。推定重量から人力での撤去は不可能。

「(なら——)」

人力では不可能。しかし、自分が作ったあのシステムなら。

戦兎は自分のコートの内側に手を入れた。しかし、あるはずのものがそこにはなかった。

「……ッ!? そんなバカな!?!」

戦兎は慌てて、今度は身体中のポケットを漁ってみたがやはりアレは見つからなかった。

どこかに落としたのだろうか。しかし、アレは落としたら確実に気がつく大きさのはず。

では最初から、ここで目覚めたときから既に持っていなかったとでもいうのか。

いずれにせよ手元がないことに変わりはない。あれがなければこの瓦礫を動かすことは不可能だ。

「最悪だ……!」

これまでのぼやきとは違う、本当の焦りと絶望から戦兎は思わずそう零した。

「……もう、いいです……早く……逃げて」

マシユの弱り切ったその声に戦兎は我に返った。

何か使えるものはないかとあたりを見回した戦兎は床に転がっている鉄パイプを見つけた。

戦兎は鉄パイプを拾い上げるとそれを瓦礫の下へとねじ込み、そこらに転がっていた

小さな瓦礫を支点とした簡易的なテコを作り上げた。そのまま渾身の力を込めて鉄パイプを押し下げようとする。

しかし、どれだけ力を入れても瓦礫はピクリともしない。

実のところ、この結果を物理学者である戦兎は試す前から分かっていた。

自分の体重 $m g$ 、筋力 F 、鉄パイプの長さ l 、瓦礫の推定重量 $M g$ 、そしてマシユを救うために動かさなければならぬ瓦礫の移動距離 d 。

それら全ての数字から成る物理方程式。

$$(F + m g) * l \parallel M g * d$$

そしてその数式から戦兎が導き出した答えとは。

$F \gg$ 戦兎の筋力の理論値

瓦礫をどかせる可能性 \parallel マシユを救える可能性 $\parallel 0$

物理現象は数字に支配される。そして数字は公正で、無情だった。
無駄な行為だ。

このままではマシユも、自分も助からない。

自分だけでも逃げるべきだ。

マシユもそれを望んでいる。

誰かが頭の中でそう叫んでいる。

その声を無視して戦兎は力を籠め続ける。

『観測スタツフに警告。カルデアスの状態が変化しました』

『シバによる近未来観測データを書き換ええます』

『近未来百年までの地球において人類の痕跡は発見できません』

『人類の生存は確認できません』

『人類の未来は保証できません』

再びアナウンスが鳴り響いた。戦兎が振り返ると宙に浮いた巨大な地球儀がまるで燃えているかのように真っ赤に染まっていた。

『中央隔壁を封鎖します。館内洗浄開始まであと180秒です』

『隔壁、閉まっちゃいました……もう、外へは……』

『そんなことは後でどうにかすればいい!』

戦兎が顔に青筋を浮かべ叫ぶ。

『く……だあああ!』

雄たけびを上げ、全身の力で鉄パイプを押す。

その時、微かに瓦礫が震えた。僅かな手応えを感じた戦兎はさらに力を籠める。

だが、ここでも物理現象は無情だった。

戦兎の力を瓦礫に伝えていた鉄パイプがくの字に折れ曲がったのだ。パイプとは筒

状のもの。当然その強度は同径の鉄棒より劣り、早々に限界に達してしまったのだ。

「くそっ！」

また一つ、救出不可能という答えを補強する因子が増え、可能にする因子が減ってしまつた。

それでも戦兎は諦めない。

例え不可能だと理解していても、何か方法があるはずだと必死に頭を巡らせる。

時間がない。早く。早く。

焦りが戦兎を苛立たせ、頭の回転を鈍らせていた。

「……すみま、せん……私の……せいで」

か細く、悲しそうな声に戦兎はハツとして声の主、マシユを見やる。

「大丈夫。何とかなるって言ったでしょ？ この天才物理学者に任せときなさいって！」

自分よりも遥かに苦しい立場にいるマシユを安心させようと明るく振る舞う戦兎。

マシユは霞んできた目を通して戦兎の笑顔を見た。こんな状況で笑顔を浮かべるなんて、自分を氣遣つてのこと以外考えられない。

その氣遣いがとても申し訳なく、そして嬉しかった。

瓦礫に押しつぶされた下半身の感覚は麻痺して痛みも何も感じない。ただ、徐々に血

の気と共に全身の力が抜け落ちていく。その虚脱感と共に自分の世界がどんどん暗く狭まっていく恐怖。気づけばマシユの口からこんな言葉が零れ落ちていた。

「戦兎、さん……お願い、が……ありま、す……」

『コフィン内のマスターのバイタルが基準値に達していません』

『レイシフト定員に達していません』

『該当マスターを検索中』

「手を……握ってもらっても、いいですか……?」

「……ああ。もちろん」

戦兎は跪き、おずおずと伸ばされたマシユの手をそつと握った。

彼女の最後の願いを聞いてやるのか?

彼女を救うことを諦めたならこれ以上ここにいる意味はない。

すぐにこの場を離れるべきだ。

そんな声を頭から追いやり、戦兎はその場に座り込んだ。

「そういうえば……マシユさんにはまだきちんと謝っていなかったね」

「……マシユで、構いません……謝る……ですか……?」

「最初に会った時、いきなり変なこと言って驚かせちゃったでしょ? ごめんね。俺も混乱してたんだ、初めての場所でさ」

あのことは忘れてほしいと言う戦兎を見て、マシユはしばらくポカンとしていたが、苦しい状態にも関わらず小さく笑い始めた。

「そんな、こと……こんな時に、律儀に……謝るなんて……変な人です……」

「そう?」

「……そう、です……そう……本当に……」

『発見しました』

『適応番号48 桐生戦兎 をマスターとして再設定します』

『アンサモンプログラムスタート』

『霊子変換を開始します』

「いやいや。世の中にはもつと変な人間がたくさんいるから。俺の仲間にもいたし。筋肉馬鹿とかネットアイドルとかドルオタとかTシャツ芸人とか」

「……本当、ですか? ……会って、みた……かった、です……」

「……そうだな。俺ももう一度……会いたいよ」

『全工程クリア』

『ファーストオーダー 実証を開始します』

特異点F 01A

「フオウ……」

何かが聞こえた。

それを切欠に男の意識が泥のように重たい倦怠感から少しだけ持ち上がる。

しかし、疲れ切った体は鉛のように重く、瞼も開く気配がない。男の意識は覚醒することなく、再び倦怠という泥の中へと――

「キユウ？」

また聞こえた。

――というよりもこのくんだり、前にもあつたような気がする。

「……何でこう、立て続けに意識を失うのか。そして――」

目を覚ました戦兎はゆつくりと立ち上がり、そして辺りを見回す。

「その度に見たこともない全く別の場所で目を覚ますのか……」

つい先程まで戦兎はカルデアの管制室、巨大な地下ホールにいた。しかし、今立つて

いる場所は地下ですらない。

灰色の空。

周囲には窓ガラスが割れ、崩れかけたビル群。

コンクリート舗装の道路はあちこちがひび割れてめくれ上がっている。

人の気配は全くなく、有り体に言って廃墟であった。

「最悪だ……」

この口癖ももう何度目だろうか。

驚くことに疲れてかえって冷静になっているのか、それとも半ば投げやりになっているのか。いずれにせよ、今自分が置かれた状況が理解できていないことに変わりはない。

「状況を整理しよう」

コンピュータにインプットするデータが虫食い状態では正確なアウトプットなど望むべくもない。ならば、インプットするデータを揃えるしかない。

「まず、俺は生きているのか」

戦兎は自分の脈を測り、頬をつねってみる。

脈拍は正常。痛覚もきちんとある。

つまり、少なくとも戦兎は夢の中や三途の川を渡っている最中ではないということ

だ。

「次に、ここはどこか」

足元のフォウを抱き上げながら戦兎は再度辺りを見回す。

何度見ても廃墟であることに変わりはなかったが、崩れかけたビルの下に日本語の看板を見つけた。つまりここは日本の都市のどこかである可能性が高い。

「三つ目に、最後の記憶」

戦兎は思い出せる最後の記憶を探ってみる。

思い出せる最後の出来事は瓦礫の下敷きとなったマシユの手を握ったこと。

「いや、違う……確か、その後に……」

そう、最後に聞いたものは事務的なアナウンス。カウントダウン。そして――

「レイシフト……」

あの惨状を目の当たりにし、レイシフトなるミツシヨンは中止になったものだとばかり思っていたが、もしプログラムによる自動進行が続行されていたとしたら？

管制室で聞いたシークエンスやカウントダウンはレイシフトのものであり、最終的に実行に移されたことになる。

「つまり、俺が今ここにいるのはレイシフトとやらの結果なのか？」

だが肝心のレイシフトが何なのか戦兎は知らないため、確証は取れない。こんなこと

になるのならばロマネにもっと詳しく聞いておけばよかったと後悔した。

つまり、まとめると――

「天つつ才物理学者、桐生戦兎は生きてそのまま謎の地下施設から日本の都市へレイシフトによつて移動した。ただしレイシフトの詳細については一切不明。なぜこの街が廃墟なのかも不明。ここがどこで今が何時頃なのかも不明」

「フオーウ」

戦兎による状況説明会の唯一の参加者、フオーウが戦兎の肩の上でまるで、〃なるほど〃とでも言う様に小さく鳴いた。自分の説明に相槌を打ってもらった戦兎は満足げに頷き――

「結局何にも分かってないじゃないの……」

「フオ!?!」

ガツクリと項垂れた。

――

「てんさいはめげない」

程なくして戦兎は面を上げた。

「分からないなら調べればいいじゃない——ということで調査にいくぞ、フオウ」
「フオウ！」

戦兎はフオウを連れ立って廃墟となった街の調査へと赴く。

「しかし、改めて観察するとこの街の惨状は……」

大通りを歩きながら戦兎は周囲の状況を観察して改めて気がついた。

ビルの窓ガラスはその多くの破片が窓の内側、屋内へ向かって散らばっている。これはつまり、ビルの外からの衝撃によつて割れた可能性が高い。

大通りの車道に点在する穴。コンクリートに空いた巨大な穴は水道管爆発のような地下からの突き上げではなく、上空からの落下物によるものだと思われた。

そして新たに発見した火災。最初に戦兎が目覚めた場所では分からなかったが、大規模な火災がこの街に起こっていることが分かった。

これからのことから戦兎は一つの仮説を導き出す。

「この街は、爆撃でも受けたのか？」

この街の惨状は上空からの砲撃や爆撃といったものの被害に似ていると戦兎は思った。
た。

「しかし、街の作りは明らかにモダン……現代日本で戦争なんてそれこそ東都、北都、西都間での戦争くらいしか——」

その時、戦兎は視界の端で何か光るものを捉えた。赤く点滅する光が放こちらへ向かって飛んでくる。

相対距離、発光体のサイズ、飛行速度、放物線の角度、肉眼による誤差と補正係数。それらの数字が一瞬で戦兎の頭の中で数式に組みあがる。

あれは、まずい――

あの発光体の落下予測地点は自分を中心に半径100m以内。

火災が沈下していないことから街が破壊されてからまだそう時間がたっていない。破壊したものはまだ近辺にいる可能性がある。

あの発光体は何らかの砲撃の類である可能性が高い。

あれは自分を狙っている――

戦兎は最も近いビルの入り口を目指して走り出した。悪いことに戦兎は街中で最も幅の広い大通りの、しかも交差点の中央にいた。

最も近いビルの入り口までは約10数m。

懸命に走る戦兎の頭上で赤い砲弾が複数の光点に分裂した。それはまるでクラスター爆弾のように戦兎へと降り注いでくる。

間に合わない。

戦兎が身構えたその瞬間、砲弾よりも先に何者かが戦兎の前へと降り立った。

「伏せてー！」

戦兔を守るように前へと躍り出た小柄な影はその身の丈よりも巨大な盾を眼前に構える。その瞬間、激しい金属同士のぶつかり合う音が鳴り響いた。まるで降り注ぐ雨を弾く雨傘のように、大量の砲弾を盾が火花を散らしながら弾き返す。

砲撃の雨が止み、戦兔が頭を上げるとそこには巨大な十字型の盾を構え、紫を基調とした

ボディースーツを身に纏った少女、マシユがいた。マシユは油断なく盾を構え続けている。

「マ、マシユ?!」

「お話は後ほど。攻撃はまだ続くようですので」

再び轟音と共に盾が振動する。どうやら砲撃はあの一発だけではなかったらしい。第二射、三射と砲弾の雨が二人を襲う。しかし、その全てをマシユの盾は弾き返した。激しい振動と爆音の中でも盾を構える小柄な影は決して揺らぐことなく戦兔を守り続けた。

やがて砲弾の雨が降らなくなると、漸くマシユは構えていた盾を下した。

「どうやら引いたようですね」

安心した様子の子のマシユ。だが、戦兔の方はそれどころではなかった。

戦兎が覚えている限りマシユは巨大な瓦礫に下半身を押し潰されていたはず。仮に戦兎と同じようにレイシフトによってこの場所に来た時に瓦礫が消えていたとしても、押し潰された下半身が動くようになるとは思えない。

ましてや砲弾の雨を盾で防ぎきるなど、体調が万全の成人男性でも不可能だ。

「あー……その、マシユ……だよね？」

「はい、マスター。あなたのサーヴァント、マシユ・キリエライトに間違いありません」
「だよね、マシユだよね……って。マスターって俺のこと？ 俺のサーヴァントって何のこと？」

この短いマシユとのやり取りの中だけで分からない単語が二つも出てきてしまった。

「いきなりのことで混乱しているとは思いますが、我々はファーストミッションの調査目的地である冬木にレイシフトしてきたのです。私のこの格好についてですが、私はレイシフトの際にあるサーヴァントから契約を持ちかけられ、それに応じたためそのサーヴァントの霊基を継承し——」

「待って。多分すごく丁寧に説明してくれてると思うんだけど、ちょっと待って」

戦兎は片手をあげてマシユを制し、説明を中断させると、そのまま明後日の方向へと向きなおる。そして——

「展開早すぎっしょおおお!!」

思い切りのけ反りながら叫んだ。

「誰か説明してくれよおお!!」

今までの常識が通じない世界に放り出され。

訳も分からないまま厄介ごとに巻き込まれ。

またまた知らない土地に放り出されたと思ったら攻撃を受けて。

知り合つて間もない女の子は変身して。

戦兔の体感時間からしてまだ最初に目覚めてから半日もたつていないのにこのトラブルの数。おまけにここまで耳にした単語の半数が未だに分からないため、理解が全く追いつかない。

ここまで溜め込んできたストレス、鬱憤、苛立ち、e t c。その全てを込めた魂の叫びだった。

「あ、あの……マスター?」

肩で息をする戦兔に恐る恐るといった様子で声をかけるマシユ。

「ハアハア……オーケー……大丈夫だマシユ。ちよつとこの天才の頭脳がハザードオンしてマックスオーバーフローしただけだから。もうフルフルマッチで落ち着いたから」

「は、はい……」

戦兔は大きく深呼吸をし、心を落ち着かせると改めてマシユの方へと向きなおつた。

「それで。悪いんだけどこの状況について、出来るだけ最初から説明して欲しい」

「そうですね。マスターは一般公募枠で魔術と関わりのない人間。説明もなしにこんな状況に陥ったら混乱しても仕方ないと思います。不肖マシユ・キリエライト、可能な限り詳しく説明させて頂きます！」

張りきった様子の子のマシユ。その様子を見て、マシユってこんなに勇ましい子だったのかと戦兎は内心驚いていた。

「ですがその前に場所を移動した方がいいと思います」

「そうだな。長くなるかもしれないし、あの砲撃がまた飛んでこないとも限らない。安全な場所を探してそこで続きを――」

「キャアアアア!!!」

その時、耳をつんざくような悲鳴が廃墟に響き渡る。

「マスター！　今のは！」

「……悲鳴だな、女の人の」

「他にも生存者がいるのかもしれない！　様子を見に行きましょう！」

そう言うが否や、マシユは悲鳴の方向へと走り出した。それを目で追いながら戦兎は独り言ちる。

「……だから、展開早すぎっしょ……」

そして戦兎も少し遅れてマシユの後を追ったのだった。

「つていうか、マシユ早ッ!? あんな重そうな盾を持っているのに!」

—・—

「何なの、何なのよコイツら!? 何だつて私ばかりこんな目に遭わなくちゃならないの!」

廃墟の中を一人の女性が必死に走っている。

身に着けているものにはモダンなデザインに前時代的な装飾が加えられており、欧州の貴族を連想させる。それらは独特な装いなれど、仕立てのよさから高価な代物であることが伺える。

女性自身も少々痩せて顔色が悪いものの、品性と教養を感じさせる美人である、本来ならば。しかし現在、その表情は今恐怖に彩られており、その原因は彼女の背後に蠢くものにあつた。

必死に走る彼女を追って大量の骸骨が一人で動いているのだ。日本の理科室にある全身骨格模型のような骸骨が大量に、しかも武器を持って追いかけてくる様はさながら

パニックホラーのようだった。

「もうイヤ、来て、助けてよレフ！　いつだって貴方だけが助けてくれたじゃない！」
女性は逃げながらこの場に居ない人間に必死に助けを求めていた。だが、当然その声に応えることはない。

必死に逃げ続けている女性だが、疲労から足元がおぼつかなく成った時、足元の瓦礫に足を取られその場に倒れこんでしまう。

倒れた女性に群がるように一斉に襲い掛かろうとした時、駆け付けたマシユが女性とスケルトンの群れの間を割って入った。そのまま骸骨、土地によってはスケルトンとも呼ばれるものとの戦闘に入る。

「大丈夫ですか!？」

マシユに遅れて戦兎も現場に到着した。倒れていた女性に駆け寄り助け起こす。

「あなたは……」

「天才物理学者、桐生戦兎です！　あなたは……って、なんだあれ!?　骸骨が勝手に動いている!？」

女性を助け起こしながら、戦兎は目に入ったマシユを取り囲んでいる骸骨の群れに驚きを隠せない。

「筋肉もない、内臓もない、おまけに脳もない！　完全に骨だけの状態でどうして動いて

いるんだ!？」

「何故って、スケルトンだからでしょう。死霊魔術の一種で生み出された」

「死霊魔術? あれが魔術か……初めて見た……」

戦兎は助け起こした女性そっちのけでスケルトンを観察していた。

スケルトンは数こそ多いものの一体一体の動きは緩慢であり、マシユの動きについていけない。マシユの振り回す盾がスケルトンを次々と打ち据え、塵に返していく。

「なぜ倒されたスケルトンは塵になるんだ?」

「どうしてマシユの体格であんなに重厚な盾を振り回せるんだ?」

「死霊魔術はどのような物理現象を引き起こしているんだ?」

「そもそも魔術というものは何をエネルギー源としているんだ?」

「あなたさつきからうるさいわよ!」

とめどなく溢れ出る疑問が戦兎の口をついて出てくる。しかしそれは女性からすれば命のかかった戦場で一々口にするなど言いたくなることばかりだった。

「あなた……顔は覚えていないけどカルデアのマスターなのでしよう!?! 緊張感が足りないんじゃない?! マスターIDは!?!」

見たところ自分よりも一回りも若い女性に怒鳴られ、戦兎は疑問の渦から引き戻された。

「えーっと、確かレフって人にはNo. 48のマスターとか呼ばれていたような……」

「48番!? あなたね、47番共々私のブリーフィングをいきなり欠席した非常識なマスターは!」

「私のブリーフィング……欠席……ということはあなたがカルデア所長!?」

「お、おまけに所長である私の顔も知らない!?」

憤慨した様子 of 女性、カルデア所長であるオルガマリー・アニメスフィアを見て、やはりロマニの懸念通り無断で欠席したことになっているのかと戦兔は悟った。

「あー実はですね。レフって人に君はブリーフィング出なくていいよって言われたので」

「レフがそんなこと言うわけじゃないでしょ!? 適当なことを言っただけで誤魔化さないで!」

「いや、本当なんですって! その場に一緒にいたマシユも聞いてますから!」

オルガマリーの剣幕に押された戦兔は思わず助けを求める様にマシユの方へと視線をやる。視線の先ではマシユが襲い掛かるスケルトンを払いのけながら戦兔とオルガマリーの背後を指さしていた。

「マスター! 後ろです!」

戦兔達ははつと後ろを振り返る。そこには群れからはぐれたスケルトンが瓦礫の陰から姿を現し、今まさに剣を振り下ろそうとしていた。

「キャアアア！」

「くっ！」

避けることも迎え撃つことも間に合わない判断した戦兎は悲鳴を上げるオルガマリーを腕の中に抱きしめる様にして庇う。

「うおりやあああ！」

スケルトンが剣を振り下ろす瞬間、雄叫びと共に何者かがスケルトンを横から殴り飛ばした。スケルトンは吹っ飛び、頭蓋骨がもげてその場に転がった。

スケルトンを倒したその者は戦兎に向き直り不敵に笑う。

「よう、調子良さそうじゃねえか……戦兎」

それは戦兎にとって最も聞きなれた声。一番の戦友にして相棒と言つていいその男の名は。

「万丈!？」

青い上着を腰に巻き、仲間にエビフライと言われた髪形をした元脱走犯、万丈龍我がそこにいた。

特異点F 01B

「マスター！ 後ろです！」

戦兎達ははつと後ろを振り返る。そこには群れからはぐれたスケルトンが瓦礫の陰から姿を現し、今まさに剣を振り下ろそうとしていた。

「キヤアアア！」

「くっ！」

避けることも迎え撃つことも間に合わない判断した戦兎は悲鳴を上げるオルガマリーを腕の中に抱きしめる様にして庇う。

「うおりゃあああ！」

スケルトンが剣を振り下ろす瞬間、雄叫びと共に何者かがスケルトンを横から殴り飛ばした。スケルトンは吹っ飛び、頭蓋骨がもげてその場に転がった。

スケルトンを倒したその者は戦兎に向き直り不敵に笑う。

「よう、調子良さそうじゃねえか……戦兎」

それは戦兎にとって最も聞きなれた声。一番の戦友にして相棒と言っていいその男の名は。

「万丈!?!」

青い上着を腰に巻き、仲間にエビフライと言われた髪形をした元脱走犯、万丈龍我がそこにいた。

「何で、ここに……?」

全くの予想外の人物との再会に戦兎が呆然としてしていると万丈はここまでの経緯を説明し始めた。

「なんかよ、目が覚めたらこのボロボロの街に居てよ。わけわかんないまま彷徨ってたから聞き覚えのある声で『展開早すぎっしょおお!』って情けない叫びが聞こえて来たんだよ」

何やら妙に再現度の高い声真似を披露した万丈。心なしかニヤニヤしているようにも見える。

「おまけに女の悲鳴も聞こえてきた。急いで声のする方へ来てみたら、見覚えある奴が襲われてるじゃねえか。仕方なく助けてやったわけよ」

万丈の言葉を聞いた戦兎はそうか、と短く答え―

「まあ万丈が聞いたつていう叫び声は幻聴だとして」

「幻聴じゃねえし。叫んだんだろ、『展開早すぎっしょおお!』」

「はあ? 叫んでねーし」

「誰か説明してくれよおお!!」

「お前どこから聞いてたんだよ!」

「あなたたちいい加減しなさいよ!」

戦兎と万丈のいつも通りのやりとり横から見ていたオルガマリーが一喝する。

「あなたたちが喋っている間にもマシユは独りで戦っているのよ! 支援の一つも出来ないの!」

再開に舞い上がった戦兎と万丈がコンビで漫才を繰り広げている間もマシユは独りでスケルトンの群れを相手とり続けていたのだ。

「そうだ戦兎。あの骸骨、何なんだ? なんで勝手に動いてんだ?」

「お前……何か分からないものを殴ったのかよ」

万丈の疑問はもつとも。しかし、これは戦兎にも分からない、むしろ教えてほしい質問であり、この場で唯一理解していそうなオルガマリーに説明してもらう時間はない。

「あの骸骨は……あれだ、お化けだ」

「え!?! でも普通に殴れたぞ?」

「体のあるお化けなんだよ。そういうお化けもいるんだ。それくらい知っておきなさいよ」

「お、おう?」

「戦兎はとりあえず適当なことを言つてこの場は胡麻化すことにした。納得がいかな
い様子の万丈を押し切つた戦兎は切り返えされる前に本題に入る。

「そんなことよりも。万丈、行けるか？」

「あ？」

「あの子を助ける」

万丈が戦兎の視線の先を追うと孤軍奮闘するマシユの姿があつた。この場にいる誰
よりも小柄な体で身の丈以上の大盾を振り回し襲い来るスケルトンと戦っている。

「何だ、あの子？ すげえパワーだな……お前の知り合いか？」

「ああ。ここに来る前に知り合つた。ここに来てからは俺のことを守つてくれている」

「へえ」

「いつまでもマシユにばかり戦わせるわけにはいかない」

「確かに。いつまでも女を一人で戦わせてちや、男が廃るな」

それまでのおちやらけた雰囲気が一変し、両者ともなすべきことを見つけた戦士の表
情を浮かべている。

「万丈」

「何だよ」

「お前が来てくれてよかった」

「んだよ、急に？」

「俺とお前なら何でもできる。例え、ここがどんな世界でも」

「……へっ。当然だろ。今までだってそうだったじゃねえか」

並び立つ戦兎と万丈。

正面切って何かを伝える必要はない。言葉を交わさずとも通じるものがあるから。

何時だつて二人はこうして困難に立ち向かってきた。それは何時如何なる時でも変わらない。

「フツ……最ツ高だな！」

「ああ！ 負ける気がしねえ！」

そうだ、自分たちならばあんな骸骨共など物の数ではない！

だから――

「行け万丈！」

「頼んだぜ戦兎！」

「……………ん？」

戦兎と万丈はともにその場から一歩も動こうとしなかった。二人はその場から動かず、首だけ回して隣にいる相棒を叱咤する。

「おい万丈、早く行きなさいよ」

「そういう戦兎こそ早く行けよ」

「……………んん？」

やはり両者ともに動こうとしない。それどころか互いに相手が先に動くことを待っているようでもある。

おかしい、と両者ともに思った。

予想では勇ましく飛び出していく相棒を見送るはずだったのだが……

「おい、万丈……お前、ひよつとして……」

戦兎は猛烈に嫌な予感がした。

「ドライバー……持つてないのか？」

出来ればこの予感の外れてほしいと願いながら戦兎は恐る恐る切り出した。

「ソナナコトナイゾ」

カタコトで言う万丈。

だが戦兎は見逃さなかった。質問を聞いた瞬間、万丈がビクリと体を震わせたことを。あからさまに目が泳いでいることを。

「この期に及んで隠している意味なんてないでしょうが！ 正直に言いなさいよ！」
「持つてないです……」

元々嘘の下手な男、万丈はあっさりと白状した。だがそれでこの緊急事態が収まるわけではない。

「馬鹿！ 万丈馬鹿！」

「馬鹿って言うな！ せめて筋肉付けろ！」

「阿呆！ 愚鈍！ 愚劣！」

「な、何か難しい言葉使つてつけど、結局馬鹿つて言つてんだろ！」

先程まで二人の間で高まっていた敵かなれども熱い、戦いへの士気はもう見る影もなかった。

「そういう戦兎こそ、ドライバーどうしたんだよ!？」

「は、はあ!? 持つてますけど? 天才ですから!」

「嘘つけ! もし持つてるなら、〃全く万丈はこれだから〃とか何とか言いながらこ

れ見よがしにドライバー出すだろ！」

「ば、万丈の癖に鋭い分析を……！」

「やっぱりお前も持つてないんじゃねーか！」

もはやただの悪友同士の言い争いに成り下がった二人の漫才をオルガマリーは無表情でじつと眺めていた。

「所長。敵勢力の掃討、完了しました。お怪我はありませんか？」

「マシユ」

マシユがそんなオルガマリーの元へと報告にやって来た。

結局スケルトンの群れはマシユ一人で殲滅した。喧しく言い争う戦兔と万丈を横目にオルガマリーはマシユの両肩に手を置いた。そしてこれまでのヒステリックな声から打って変わりはつきりとした口調でこう言った。

「あいつらは駄目だわ。あなただけが頼りよ」

こんなにも真直ぐ所長と目を合わせたことはこれまで一度もありませんでした。でも目は死んでいましたと、マシユは後にそう語った。

—・—

「マシユ、ごめんな。こいつが役立たずなせいで最後まで一人で戦わせちゃって」
「はあ!?! お前も同じ役立たずだっただろ?」

マシユが独りでスケルトンを倒してしまったことによく気がついた戦兎と万丈は二人揃ってマシユの元へねぎらいと謝罪にやって来たのだった。

「いえ、お気になさらず。これが私の役目ですので」

「いや、そういう訳にもいかねえだろ。女の子独りで戦わせるなんて情けねえことは出来ねえ。次は俺も戦うからよ」

当のマシユは全く気にしていないようだったが、自分より小さな女の子が戦うのを黙ってみていることなど万丈には到底出来ない。

「いえ、それは不可能です。あなたは……」

「万丈龍我。戦兎の腐れ縁だ」

「なるほど。マスターのお知り合いでしたか。初めまして万丈さん、マシユ・キリエライトと申します。マスターである戦兎さんのサーヴァントです」

「戦兎の……サ、サーヴァント? 何だそれ?」

聞いたことのない単語に首をかしげる万丈。そしてそれまで隣で見守っていた戦兎も話に加わって来た。

「それは俺も聞きたい。いい機会だから説明の続きをお願いできないか?」

「構いません。それでは……」

「待ちなさい」

不意に話に加わって来たのはそれまで静観していたオルガマリーだった。

「色々と積もる話があるのは分かります。私もあなた達には聞きたいことが山ほどあるから。でも今私たちに必要なのはカルデアとの連絡。そのための霊脈の確保こそが最優先事項よ。それ以外のことは後回しにして」

有無を言わさないオルガマリーだが、その意見には筋が通っている。状況が飲み込めていない戦兎も自分より今の状況を理解しているオルガマリーの意見に反対するつもりはない。

「なあ戦兎……あの女、誰？」

最も他人の迷惑など意にも介さず、思ったことをそのまま口にする男もいた。戦兎は万丈に耳打ちで教えてやる。

「カルデアの所長だよ。俺もここにきて初めて会ったけど」

「カルデア？」

「ここに来る前にいた施設だよ。万丈もそこから来たんだろ？」

「……いや、知らねえ。俺は目を覚ましたらいきなりこの街だったぞ？」

「………何？」

この冬木と呼ばれる都市はレイシフトにより移動しなければ来られないのではないのか？

てつきり万丈も自分と同じカルデアから来たものだとばかり思っていた戦兔は疑問に思った。

まさか万丈は偶然、戦兔達がレイシフトにより移動したこの場所に居合わせたというのか。そんな偶然は考え辛いが……

「そこー さつきからブツブツうるさいわよ！ 私の話をちゃんと聞きなさい！」

「それから！ 私の名前はオルガマリー・アナムスフィア！ 自分の雇用先のトップの名前くらい覚えておきなさい！」

まったくもう、と怒りを露わにしたオルガマリーの叱責が飛んだ。

まるで問題児を諫める学級委員長のようなだと万丈は思い、所長は怒りつばいという口マニの言葉を戦兔は思い出した。

「不幸中の幸いというべきか、霊脈の強いポイント、ターミナルポイントはここよ」

オルガマリーは靴を鳴らして地面を軽く蹴った。偶然にもこの交差点の真ん中がそのターミナルポイントだというのだ。

「マシユ、ここにあなたの盾を置いて。それでカルデアとのラインが繋がります」

「構いませんか、マスター？」

「いや、構わないけど……何で俺に聞くの？」

オルガマリーの言葉を聞いたマシユは何故か戦兎に許可を求めてきた。自分よりも立場が上で、知識のあるオルガマリーがいるのになぜ自分に許可を求めめるのか。

「マスターは私のマスターですので」

マシユはそう言つて盾を地面に横たえた。意味が分からないといった様子の戦兎の傍でオルガマリーは渋い顔をしたままぼそりと呟いた。

「……あなたたちのことも後でゆっくり聞かせてもらおうからね」

— —

『やつと繋がった！ もしもしこちら管制室！ 誰か聞こえるかい？』

マシユが盾を地面に置くと何やら幾何学的な文様が周囲に浮き上がり、同時に戦兎のポケットから何やらコール音のような高い音が聞こえてきた。

戦兎がポケットを漁ると中から出てきたのはレフに押し付けられたまま戦兎が持っていたカルデアのウェアラブル端末だった。何やら端末の一部が発光しており戦兎がスイッチを入れると立体映像と共に見覚えのある顔と声が飛び出してきた。

「ドクターロマン!？」

『ああ、戦兎! 君なのかい!?』

映像から顔を覗かせたのはレイシフト前に知り合ったばかりの医療部門のトップ、ロマン・アーキマンだった。

『カルデアのどこにもいないからもしやとは思ったけど、やっぱりレイシフトに巻き込まれていたのか……右も左も分からない状況だったろうに、よく無事でいてくれた。』

心底ほっとした様子のロマン。

「なあ戦兎。こいつも知り合いか? 少し見ない間に随分知り合いが増えたんだな」

『ん? 君は……?』

「万丈龍我だ」

『バンジウ、リュウガ? どこかで聞いた気が……』

戦兎の隣でロマンを指さす万丈を見たロマンは端末を弄り出した。ものの数秒で目当てのものが見つかったらしく、驚いた様子で通信に出た。

『万丈龍我……思い出したよ。47番目のマスター。戦兎と同じ一般枠のマスターだ』

「本当か、ロマン!？」

ロマンの情報の意味が分からずポカンとした様子の万丈よりも隣の戦兎の方が余程驚いていた。

『ああ。しかし彼もレイシフトに成功していたとはねえ。いや、無事で何よりだけれど』
ただほつとしている様子のロマニと違い、戦兎は何やら考え込んでいる様子だった。

『ところで君たちの他には誰かいないのかい？ 通信が安定したということは霊脈のターミナルポイントを確保したはずだけど、戦兎じゃ無理だろうし』

「私よ、ロマニ」

オルガマリーが戦兎と映像のロマニの間に割り込んでくる。

『うひゃあああああ!!? 所長!!? 生きてらしたんですか!!? あの爆発の中で!? ほんだけ!!?』

『どういう意味よ! 大体なんで医療セクショントップのあなたが司令官席にいるの!?

レフはどうしたの!?! レフを出して!」

驚いていたロマニだがレフの名を聞いたその表情を曇らせた。

『レフ教授は指令室で指揮をとっていました。あの爆発の中心です……生存は絶望的かと……』

「そんな……」

唯一と聞いていい味方が死んだことを聞かされオルガマリーの表情が絶望と悲しみ
に彩られる。だが、追い打ちをかけるように悪い知らせはまだ続く。

『僕が作戦指揮を任されているのは僕より上の階級の人間がいなためです。カルデア

はその人員の八割を先の爆発で失いました」

「ちよつと待つて？　じゃあ他のマスター適正者たちは？　コフィンの46人はどうなったの!？」

『全員が危篤状態です……医療器具も人手も全然足りません。何人かは助けられても全員なんてとても……』

「ふざけないで！」

「直ぐに凍結保存に移行しなさい！　死なせないことが最優先よ！」

『ああ！　そうか、コフィンにはその機能がありました！　直ぐに手配します』

そう言うが否や、ロマニは席を離れた。映像の外から大声で人を集めているロマニの声が聞こえてくる。

「凍結保存というのは所謂コールドスリープのこと？」

「その通りです。魔術により肉体への負荷を軽減し、科学的に冷凍状態を維持することで後遺症発症を抑えた長期間のコールドスリープを瞬時に可能としています」

戦兎の質問にマシユが答えてくれた。魔術と科学のハイブリッドともいえるコールドスリープ技術の解説を戦兎は興味深そうに聞き入っていた。

「しかし、それでも本人の承諾なく凍結保存を施すのは違法のはず……なので所長の判断には驚きましたが、確かに人命を第一に考えれば……」

「そんな訳ないでしょう」

マシユのフォローを切って捨てるオルガマリー。目を点にして驚くマシユを放つてオルガマリーは事も無げにこう続けた。

「死んでさえないなければ後でいくらでも弁明できるからよ」

科学、魔術の両サイドに対してコネクションを持つカルデアの蘇生技術は非常に高い。しかし、死者を蘇生することだけは如何なる技術、知識をもつても不可能。逆を言えば、オルガマリーの言う通り、死んでさえないなければいくらでも挽回することが出来るのだ。

さらに危篤状態にあるというマスターたちはその多くが優秀な魔術師、引いては魔術界における高名な家の出身だった。もしそんなマスターたちを死なせでもしたら魔術社会の多くが敵に回ってしまう。それだけはカルデア所長として絶対に避けなければならない。

「そもそも46人の命なんて私に背負えるわけないじゃない……頼むから死なないでよ……」

神経質そうに爪を噛み、ひっそりと祈るように零したその言葉。

決して大きな声ではなかったが、それこそが彼女の切実な思いなのだろう、と戦兎はオルガマリーを見てそう感じた。

その後、しばらくしてロマニが再び映像に現れた。

『危篤状態にあった全員の凍結保存が完了しました。今後の予定としては外部に救援を要請し、その間にレイシフトの修理を進め、救援が到着し次第カルデアを再編、所長の帰還と共にミッションを再開する……といったところでしょうか』

「結構。私がおの場においても同じ方針を取ったでしょう。ロマニ・アーキマン、あなたに私が戻るまでカルデアを預けます。その間、私はここにいる者たちと特異点の調査を進めます」

『ええっ!? 救援が来るまで大人しくしているんじゃないんですか!? しかも調査に行く!? 所長自ら!? ビビりなのにな!?』

「五回もいっぺんに驚くな! 給料減らすわよ!」

『ヒイイイ!? 地味に怖いこと言ってる!』

恐れおののくロマニを放ったままオルガマリーは言葉を続ける。

「この特異点F……冬木には下級の魔物、スケルトンクラスの脅威しか確認できなかった。だからマシユがいれば十分対処可能だと判断したまでよ」

『マシユがいればってそんな……確かにマシユはAチームのメンバーでしたが、肝心のサーヴァントと契約していません。戦力として当てにするのは……』

「問題ありませんドクター。私の状態をチェックして見てください」

『ん？ マシユかい……これは!?』

『ハレンチすぎる！ 僕はそんな子に育てた覚えはないぞ!?』

ロマニの言葉にマシユとオルガマリーは凍り付いたように動かなくなった。

ここまでピンチの連続であったため言及する余裕がなかったが、今のマシユの格好は戦兎がカルデアで初めて会った時のパーカー姿ではない。

盾と同じ深紫の肌に密着するノースリーブのボディスーツ、四肢と腰に装着している装甲には繊細な装飾加工が施されており、防具としてよりも装飾品としての趣が強そうだった。

そして何より特徴的なのは、それら全てを足し合わせても競泳水着より少し多い程度の布面積しかないことだろう。

「確かに、マシユのあの格好については俺も疑問だったんだよね。戦闘服にしては布地が少なすぎるし、インナーだとしても上から付ける装甲が少なすぎる」

「いや、そんなこと言ってるんじゃないだろ。マシユのあの格好がエ」

「おっと万丈そこまでだ！ いいかこの小説は健全なんだ全年齢なんだ！ あんまりマシユの格好が性的だとか煽情的だとか露出度が高いとかメタなことを言うんじゃない！」

「お、おう」

戦兎の言葉の意味が分からなくとも気迫に押され領く万丈。その向こうでは戦兎の言葉に顔を赤らめて俯いているマシユがいた。

「コホン……ロマニ、マシユはおそらくデミ・サーヴァントになったんじゃない？」

オルガマリーが咳払いを一つ。場の空気をシリアスに引き戻しつつ話を進める。

『デミ・サーヴァント……英霊と人間の融合……カルデア六つ目の実験がこの土壇場で成功したと？』

「私が説明します」

マシユは己に起きた出来事について覚えている限り説明し始めた。

レイシフト前、カルデアの地下ホールにて彼女は爆発に巻き込まれ命の危機にあった。

しかし、カルデアがファーストミッションのために事前に用意していたサーヴァントもまた爆発でマスターを失い、消滅する危機にあった。

その直前、そのサーヴァントは自身の英霊としての能力と宝具を譲り渡す代わりに特異点の原因を排除するという契約をマシユに持ちかけたという。

マシユはその契約を結び、戦兎達を救った戦闘能力を得たのだった。

『なるほど、そういうわけが』

「マシユ、あなたに力を譲り渡した英霊は誰なの？」

「……わかりません。彼は私に力を託してすぐ消滅しました。最後まで真名を告げずに……です。私は自分がどの英霊なのか、自分の宝具が何なのかさえ分からないのです」

『いや、召喚に応じたサーヴァントが友好的とは限らない以上、マッシュがサーヴァントになつてくれたことはこれ以上ない幸いだよ。何しろ、全面的に信用できるからね。ですよね、所長?』

「え!? え、ええ。そうね……そうよね……」

申し訳なさそうにするマッシュに対してロマンはいつもの調子で明るく答える。が、オルガマリーは歯切れの悪い返事を返していた。

「なあ戦兔……」

「何だよ」

「話に全くついていけねえんだけど……」

「マジでか。駄目だなー万丈は」

「うっせ。そういう戦兔は分かるのかよ?」

「そりゃあ、お前……当然でしょ」

「じゃあサーヴァントって何だよ?」

「……あれだよ、召使い「servant」のことだろ?」

「何で召使いが武器持って戦うんだよ？」

「……」

「……」

「……天才にだって……」

「あ？」

「……天才にだって、分からないことくらい……ある……」

一方、魔術の知識ゼロ組である戦兔と万丈は当事者なのに蚊帳の外。話についていけず、完全に取り残されていた。

そんな二人のことをマシユが思い出すまで今しばらく時間がかったのだった。

そしてようやく魔術の素人である戦兔達に説明がなされた。

まず、何度も話に挙がっている「サーヴァント」とは何か。

人類史におけるあらゆる歴史、神話、伝承に登場する人物が大勢の人々に浸透し、信仰を集めることで死後その人物はある種の精霊にまで昇華されるのだという。これを英霊と呼び、人の世の理を守る守護者である。そしてその英霊を召喚し契約を結んで使い魔とする、これをサーヴァントと呼び、契約した魔術師はマスターと呼ばれる。

サーヴァントは人間を遥かに超えた力を持ち、一流の魔術師であつても勝てないときれる、まさに最強の意思を持つ兵器であるという。

サーヴァントの弱点はエネルギー源である魔力をマスターから供給されているため、サーヴァントはマスター無くして存在し続けることが出来ないことである。

サーヴァントは魔術における最上位の存在であり、通常であれば聖杯なくして如何なる魔術師も召喚することは出来ない。しかし、カルデアは大規模なエネルギーソースの確保と独自の研究成果によりサーヴァントとマスターの双方の合意を持って召喚を可能とするシステムを開発した。それがシステムFateである。

『そしてマシユは事前に召喚されていた正体不明のサーヴァントの力を受け継ぎ、人の身でサーヴァントとなった。これをデミ・サーヴァントと呼び、そのマスターは戦兔、君というわけだ』

ロマニは画面の向こうから戦兔を指さす。

「でも俺はマシユとその契約とやらを結んだ覚えがないんだけど……」

「それは私が強引にマスターと契約を結んだからです。サーヴァントである以上、マスターはどうしても必要だったので……ごめんなさい。勝手なことをして」

俯くマシユに戦兔は笑いながら言った。

「謝ることなんてない。マシユは俺をマスターとしてサーヴァントになった。そしてサーヴァントになったおかげで命が助かった。そのマシユは俺の命を助けてくれた。つまり、俺はマスターになったおかげで自分の命が助かったってこと。簡単な三段論法

でしょ?」

マシユの行為を論理的に正当化しつつ言外にありがとうという戦兔の言葉に、マシユは胸を撫で下ろした。そして、この人をマスターに出来てよかったと改めて思った。

「合点がいったわ。どうしてあなたみたいいな素人がサーヴァントのマスターになれたのか。その令呪を見た時は目を疑ったけど、サーヴァントの側から強引に契約を結んだからなのね」

それまで様子を見ていたオルガマリーは戦兔の右手に視線を落としながらどこか安心したような声色で言った。

戦兔はオルガマリーの視線の先にある自らの手をみて驚いた。右手の甲にはそれまでなかった何らかの文様が浮かび上がっていたのだ。

「おおっ!? 何だこれ?」

「おい戦兔。お前いつの間に刺繍入れたんだ?」

「馬つ鹿! そんなわけないでしょ! こちとら学者でヒーローよ? イメージ崩れちゃうでしょうが!」

脇から覗き込んだ万丈にどこかズレた反論する戦兔。そんな二人をよそにオルガマリーの開設は続いている。

「それが令呪よ。サーヴァントのマスターの証であり、命令の強制権を示しているの」

「命令の強制権？」

「令呪は基本的に三画で構成されているの。令呪の画を消費することでマスターはサーヴァントに命令できる。この命令をサーヴァントは拒否することは出来ない」

『一種の安全装置だと思ってくれ。さつきも言ったけど、サーヴァントによつてはマスターに対して友好的ではない場合、そもそも意思の疎通が不可能な場合もある。そんなサーヴァントの手綱を握るために令呪は必須なのさ』

戦兔はオルガマリーたちの解説を聞きながらしげしげと手の甲の令呪を観察していた。

「魔術……か」

先程目にしたスケルトンも、この令呪も同じ魔術だという。魔術と一口に言ってもその形態は多種多様のような。そう言ったところは科学技術と同じなのだなどと戦兔は思った。

こんな状況でなければゆっくりと話を聞いて研究してみたいものだが。

「なあ戦兔。結局サーヴァントって何なんだ？」

「何だ万丈。さつきの説明で分からなかったのかよ」

「今一ピンとこないんだよ。そもそもいきなり魔術って言われてもわけわかんねえし」

頭をガシガシとかく万丈。しかしそれも無理からぬことであろう。戦兔自身も全て

理解できたわけではないのだ。

「仕方ない。じゃあ俺が万丈でも一発で分かるように説明してやるよ」

戦兔が自信満々で言った。分からない事象があるとき、その理解を助ける方法がある。

その言葉にそれまでよそで今後の活動を話し合っていたマシユ、ロマニ、オルガマリーといった魔術組が興味を示した。一体どのような説明をして魔術の素人を納得させるのか。

「サーヴァントってのはな」

マシユたちも耳をそばだてて戦兔の次の言葉を待つ。

「先輩ライダーにゴーストって人がいただろ？ あの人の持ってた眼魂、あれが人の姿をしたのがサーヴァントだ」

しかし、今度はマシユたちが戦兔の説明に疑問符を浮かべる番だった。

先輩でライダーでゴースト？ 眼魂？ 何だそれと言いたくなるような言葉ばかりが飛び出してきた。それらがどうしてサーヴァントと結びつくのかさっぱり分からない。

「なるほど！ よくわかったぜ！」

だが万丈はその説明で納得したらしい。疑問が解消され晴れ晴れとした表情をして

いる。嘘や誤魔化しの類ではないようだ。

そう、人にものを教えるときはその相手が理解していることに例えればよい。その方は科学でも魔術でも同じことだ。

逆に今度はマシユたちが説明の説明を求めたい気分だったが。

なんだよもーそれならそうと先にそう言えよなー

万丈でもわかるように説明したこの天才を褒め称えなさいよ

よつ自称天才物理学者！

馬鹿にも分かるように説明するのは天才の頭脳を持つてしても大変でした

馬鹿って言うな！　せめて筋肉付けろ！

などと再三（馬鹿みたいに）盛り上がっている二人を見ていると特に深い意味もないような気がしてきた。

そも、ここでまた説明を要求すれば説明合戦となつてさらに時間がかかるかもしれない。多少他より安全だと言つてもここが戦場であることに変わりはない。それよりもっと優先して打ち合わせなければならぬこともある。

「この際あの二人は放っておきましょう」

オルガマリーは戦兎達を無視して話を進めることに決めたようだった。その判断の

速さはさすが組織の長とでも言うべきか。しかし、それがロマニには不思議であった。

『所長、失礼ですが頭でも打ちました？ 普段ならもつと取り乱してヒステリックになっているはずなのに。今日は妙に落ち着いてるといいますか……』

「どういう意味!?! 普段は落ち着いていないとでもいうわけ!?!」

しまった藪蛇だったか、とロマニはオルガマリーの怒声に備えたが、当のオルガマリーはそれ以上怒ることはなかった。

「……別に落ち着いているわけでも何でもないわ。ただ、諦めただけよ」

『諦めた？ 何をです?』

予想外の答えにロマニは思わず聞き返す。

「全てよ……」

オルガマリーは自嘲気味に笑った。

「カルデアがテロ攻撃を受けるといふ最悪のアクシデントから始まって。頼りになるレフも精鋭部隊であるAチームもいない。助けに来たと思つた奴らは魔術の知識ゼロの素人以下」

マシユは別よ、とオルガマリーは付け加えながら戦兎と万丈の方を見やる。視線の先では戦兎が万丈に魔術について教えていた。

「せんせー! 魔術と魔法って何が違うんですか?」

特異点F 01C

三行でわかる前回のあらすじ

- ・特異点にやって来たら万丈がいたよ！
- ・ベルトがないから変身できないよ！
- ・所長がキレたよ！

— —

オルガマリーが思いの丈を叫び散らしてからしばらくして、目元が擦れて赤くなったオルガマリーが戦兎達を呼び集める。

「ようやく今後の方針が決定したので、それを発表します。全員、心して聞くように」
オルガマリーは一区切りをつけて、軽く息を吸う。その後、ゆっくりとはつきりした声で話し始めた。

「このファーストミッションは確かに当初の計画から完全に逸脱しました。十二分に揃えたはずの戦力も、人員も何もかも失い、状況は最悪と言っていいでしょう。しかし、

我々の使命は終わってはいません。残された我々だけでもファーストミッションは遂行しなければならぬのです」

それはまるで演説のようだった。巨大な組織の長らしく、これまでの狼狽えたり怒鳴ったりしていた様子からは想像もできない程に堂々とした立ち姿で喋るオルガマリ。

「所長。それについて俺から質問があります」

「桐生戦兎。あなたの発言を認めます」

オルガマリーの演説に待ったをかける様に挙手した戦兎。演説を遮るのは少し気が引けたものの、戦兎にはどうしてもはつきりさせたいことがあった。

「そもそもこのファーストミッションの目的とは何なのですか？ レイシフトというものは何をするために実行されたんです？」

「……あなた、そんなことも知らずにこのプロジェクトに参加したの？ 最低限の説明位はあつたはずだけど？」

「あーそれは……」

『所長。戦兎は軽度の記憶喪失の疑いがあり、カルデアに来るまでの記憶が曖昧になっていると聞いています』

「そうそう！ そうなんです！ 慣れない霊子ダイブというやつのでせいで」

「……なるほど、記憶喪失。更に私のミツシヨン前のブリーフィングにも欠席。おまけに魔術知識もゼロ、と。なるほど、なるほどね……」

額に青筋を浮かべヒクヒクと口元を震わせるオルガマリー。よほど腹に据えかねているようだったが、それをぐつと抑え込む。

「いいでしょう。この際ですからきちんと説明し直しましょう。特に桐生戦兎、あなたはこのミツシヨンの最重要人物なのですから、きちんと役目を理解してもらわないと困ります」

そう言つてオルガマリーは話始めた。

そも今回のミツシヨンの発端はカルデアスが100年後の人類の衰退を観測したことから始まった。

カルデアスとは戦兎がカルデアで見たあの巨大な地球儀のことである。あれは地球が一つの生命体であり魂を持っているという定義に基づき、地球の魂を複写したものだ。早い話が地球の縮小コピーである。

またカルデアスは地球のライブラリーであると同時にシミュレータでもある。カルデアスは専用の観測機シバを用いることで過去の事象を検索したり、未来の予測結果を観測することが出来るのだ。そしてカルデアでは100年後にシバのピントを合わせる事で未来観測を行っていた。100年後に人類が存在し、文明を築いているかを観測

することで人類の歴史、すなわち人理を保証する、それこそがカルデアの役割なのだ。ところがある時、カルデアスが異常を観測した。突如として100年後の人類文明が観測できなくなったのだ。これは100年以内に人類が文明を維持できない程衰退することを意味する。

カルデアはカルデアスの過去検索機能を用いて原因を探った。その結果、それまではなかったはずの一つの事象が過去に発見されたのだ。過去の事象であるにも関わらず詳細が分からないそれは、人類史という長い年表の中に突如として現れた黒く塗りつぶされた点とも言える。人類史の崩壊という未来と同時に現れたその謎の時間帯を特異点Fと命名し、カルデアは人類史崩壊の最重要要因として調査を決定した。

調査にはかねてより実験がなされていたレイシフトが用いられることになった。レイシフトとは人間を擬似霊子化（魂のデータ化）させて異なる時間軸、異なる位相に送り込み、これを証明する空間航法であり、簡単に言えば魔術によるタイムトラベルである。レイシフトを用いれば現代の人間が既に起こった過去の事象に干渉することが可能となる。この技術を持つて特異点Fにタイムトラベルを行い、過去から変化した原因を特定、排除することこそが今回のファーストミッションの概要だった。

そのための戦力として採用されたのが魔術において考えうる最高クラスの戦闘能力を持つサーヴァントというわけだ。カルデアが開発したシステムFateがあればこ

「そ可能となった戦力である。」

ただし、レイシフトは適性のある人間しか行うことが出来ず、その適正を持つ人間は稀である。さらにそこにサーヴァントと契約を結べる素質、マスター適正を併せ持つという条件が重なるため、ミツシヨンに参加できる人間は極めて限定されてしまった。そのため、カルデアは魔術師に拘らず適正ある人間を探していた。今回のファーストミツシヨンに挑むマスターは総勢48人。その内10余名は一般人でありながら、そのような経緯でマスターとしてカルデアに招かれたというわけだった。そして、その内の二人が戦兔と万丈なのだという。

「これがこれまでの経緯です。分ったかしら？」

「……」

オルガマリーの説明を聞いた戦兔は俯きながら何やら独りでブツブツとつぶやいている。

ようやく自分の立場の重要性が理解できたのかとオルガマリーは思ったが。

「凄いッ！」

「はっ？」

突然弾けるように顔を上げた戦兔。

「魔術と科学が違う技術体系だと言っても、人間の技術には違いない！ 人間の力でタ

イムトラベルを実現するなんて！」

興奮した様子で戦兎は一気に捲し立てる。

「タイムトラベルはまだ仮説の段階で、その仮説も不完全なものばかり！ 当然科学的な証明も検証もされていなくて、まさに未知の技術！ 物理学者としてこれ程心惹かれるものはない！」

「俄然興味が湧いてきた！ 是非ともその技術について知りたい！ 出来れば検証もしたい！ 教えて下さいお願いします！」

頭の癖毛がピンと逆立ち、戦兎は目をらんらんと輝かせてオルガマリーに詰め寄る。そのまま勢いよく腰をカクンと90度曲げて頭を下げた。

そんな戦兎にあっけにと取られていたオルガマリーだったが、すぐに平静を取り戻した。

「却下よ！ この非常時にそんな悠長なことをしてられるはずがないでしょう」

当然と言えば当然の返答であるが、やはり残念なものは残念だった。ピンと逆立っていた戦兎の頭の癖毛は戦兎の心情を体弁するかののように力を失いヘンニヨリと垂れ下がってしまう。

「大体、魔術のまの字も知らない素人が魔術の最高峰ともいえるレイシフトについて説明されても理解できるはずがないでしょう。時間の無駄よ」

きつぱりと断言するオルガマリーに戦兎はピクリと反応した。

「確かに俺は魔術のことを何も知らない。でも知らないならば学ばばいい」

戦兎は挑戦的な笑みを浮かべている。

「このミツシオンを無事に成功させて、俺が魔術の知識を身に着けたら、レイシフトについて詳しく解説してください」

「はあ？ 何を言っているのあなた？」

「まあ、報酬替わりといったところで。どうやらこのミツシオンは最初に想定していたよりも難易度が段違いに跳ね上がったようですし」

「……私を脅しているの？」

オルガマリーの言葉に緊張の色が滲み出ている。

戦兎は生き残った二人のレイシフト適正者にしてマスターの一人。さらにサーバーととの契約に成功した唯一の人物。彼抜きではファーストミツシオンは継続すら不可能と言っている。

ゆえに彼の要求をオルガマリーが断ることは出来ないと判断し、レイシフトの技術の全てを寄越せ、さもなければ協力しないと脅迫しているのではないかと疑っているのだ。

「え？ 違いますけど？」

だが戦兎はあつけらかんと答えた。

「やつぱり駄目ですかね？ まあ、明らかに独占技術な上に危険な技術だから無理なものか……あ、ミツシヨンは全力で協力するので安心してください」

あつさりと引き下がった戦兎に逆に戸惑うオルガマリー。これは譲歩か？ それともこちらの出方をうかがっているのかと疑っていると。

「別に戦兎はあんたが考えてるようなことは何も考えてないぜ？」

いつの間にかやつてきていた万丈がオルガマリーに向かってそう言った。

「あいつはただレイシフトってやつに興味があっただけだ。昔つから新しいものには周りが引くほど夢中になつちまうんだよな」

万丈の視線の先では戦兎はマシユの持つ大盾を興味深そうに調べていた。だが想像以上に重かったのか、マシユから盾を受け取った途端にフラフラとよろめいて、慌てたマシユに支えられていた。

「あいつは根つからのお人よしだからな。あんたが本当に困ってんなら喜んで力を貸す。だからあんたも教えられる範囲でいいからあいつにレイシフトってやつを教えてやつてくれよ」

それだけ言うと万丈はその場を離れようとする。

「あなたは？」

「ん？」

「あなたも一応マスターなのでしょ？ あなたはどうするの？ あなたも何か望むものがあるの？」

そんなオルガマリイの言葉に対して万丈は短く答えた。

「俺は戦兎についていくだけだ」

— —

「大分話が脱線してしまっただけで、私たちがやらなければならないことは理解できたかしら？」

オルガマリイの言葉に頷くマシユと戦兎。頷く二人を見てから頷く万丈。

「結構。では次に具体的な方針を説明します。ロマニ」

『ハイハイっと』

オルガマリイの持つ端末から地図らしき映像が映し出される。

「この特異点F、冬木は元々聖杯戦争と縁の深い土地だった。過去4回にわたって聖杯戦争が60年周期で行われていたと記録されています。最後に行われたのは西暦2004年。まさに今、我々がレイシフトしてきたこの時代です」

「聖杯戦争とは魔術世界において珍しいものではない、ということですか？ 聖杯は複

数あると？」

「聖杯戦争における聖杯は聖書に記載されている本物とは違います。この場合の聖杯とは、あらゆる願いを叶えられるほどの魔力をもったもの、全般を指し、そういった代物は真贋含めて数多く発見されています。この冬木の聖杯も実体は「杯」ではなく魔力を集積する超ド級魔法陣だったと記録されています」

「この特異点Fの直接的な原因は分かりませんが、この時代、この場所が特異点になったことを考えればその原因は冬木の聖杯に関わると考えるのが妥当です。よって我々の目的地は記録に残されていた冬木の聖杯が設置されていた場所、ここです」

オルガマリーが地図のある一点、街にほど近い山中の中腹辺りを指さした。

『記録によると聖杯はこの山中に設置されていたようだ。正確な場所は記録に残っていないから直接行って確かめるしかない』

こうして目的地の定まった戦兎達は聖杯があったとされる山の洞窟を目指し、出発した。

— —

目的の山に向かうにはこの廃墟と化した街を抜けていく必要がある。戦兎達はマ

シユを先頭にして街の中を進んでいった。やがて日が傾き、薄暗くなった頃に一行は街中心から少し外れた通りに出た。

そこは街を横断する大きな川に臨んだ川縁で、大勢の人間が往来できるほどの広さがあつた。普段ならば町に住む人間の憩いの場所として賑わっていたであろうこの場所も、今は人気もなく静まり返っていた。

「もう少しで街を抜けますね、マスター」

「そうだね。ここまで何もなくて来られて良かった。ところでマシユ、そのマスターって呼び方、止めない？」

「私はマスターのサーヴァントなので」

「うん。止めないってことね」

「しかしこんな惨状になつているのに街は不気味なほど静かだな……」

冬木は特に大きいわけでもないが小さい街というわけでもない。それなりの人口があつたと街の規模から見て取れる。しかし、この街に来てから生きている住人を見かけていない。火災が沈下していいことからこの街が爆撃を受けてからそう時間がたつていないと推理した戦兎だったが、可燃物さえあれば火災が数日に渡つて続くことは珍しいことではない。考えられるのはこの街が何らかの攻撃を受けて大分時間がたつており住民は既に非難を終えたか。もしくは、逃げる間もなく全滅したか。しかし爆撃だ

けで住民が一気に全滅するというのも考え辛いが……

そこまで考えたところで戦兎の思考は突然やって来た衝撃に遮られた。どうやら考え事をしながら歩いてきたために何かにぶつかってしまっただけらしい。

ぶつかっただのは何やら人の背丈ほどもある石のようだった。何でこんな所に石が立っているのだとぶつけた鼻をさすりながら石を反対側から覗き込んだ戦兎は小さく声を上げた。

「マスター!? どうしました!?!」

傍にいたマシユが聞きつけ駆け付けてくる。

「目が合った……」

「はい?」

マシユは状況が飲み込めないまま戦兎が指さす石を同じように覗き込み、そして息を呑んだ。目が合ったからだ。

その石は石像だった。本物と見間違えうほど精巧な石像には怯えた表情が刻まれている。その恐怖に濡れた目と覗き込んだ時に目が合ったのだ。

「何でこんなところに石像が……」

訝しむマシユの隣で戦兎が驚愕の表情で辺りを指さす。

「見てくれマシユ」

戦兎の指し示すものに気がついたマシユもまた息を呑んだ。

石像は一体だけではなかった。暗闇に紛れて気がつかなかったが、その河川敷には大量の石像が所狭しと並んでいたのだ。しかもその全てが恐怖と苦悶の表情を浮かべていた。

「マスター……これは一体」

「下がって万丈！ 触れては駄目よ！」

突如として暗闇にオルガマリーの鋭い声が響く。

時間は少し戻り戦兎が石像にぶつかった頃。

万丈は戦兎とマシユのいる道のすぐ脇にある土手の下を歩いていた。特に意味はなく、ただ土手を下って川を近くで眺めたい、程度の意味しかなかった。

「しっかし、ここまで何にも起こらなかったな。またあの骸骨共が出てくるかと思ってただけだよ」

ここまでの道中で戦闘行為は一切発生していない。想定していたスケルトンの襲撃もなく安全な道中に全員が安心した半面、気も少し緩んでいた。

だからだろう。万丈は二つの失敗を犯した。

一つ目はすぐ傍とはいえ、唯一の戦闘能力を持つマシユから離れて行動したこと。二つ目は目の前に現れた不可解なものに対して危機感がなかったことだった。

「何だこれ？ 鎖？」

万丈の目の前には行く手を塞ぐように幾重にも網のように張り巡らされている鎖があった。屋外の、しかも土手にはあまりに不自然なそれにたいして万丈は不用意にも手を伸ばしてしまった。

「下がって万丈！ 触れては駄目よ！」

オルガマリーの警告に反応してとつさに手を引つ込めた万丈。同時に鎖がまるで意志を持っているかのようにしなり、獲物を捕らえようとする蛇のように万丈を絡め捕らうとした。

万丈はすんでのところを身を捻って鎖から逃れることに成功した。オルガマリーの警告がなければ間違いなく万丈はこの鎖に絡め捕られていただろう。

「な、なんだこりゃあ！」

「大丈夫！」

「あ、ああ。おかげで助かったぜ」

オルガマリーが駆け寄って万丈の無事を確認する。怪我もなく無事だったことに胸を撫で下ろしたオルガマリーは次いで目を三角に釣り上げて万丈を叱り始める。

「あなた馬鹿なの！？ この鎖から感じる強力な魔力……明らかに何らかの魔術礼装でしょうが！」

「そんなこと言われても魔力なんて分からねえよ！」

「それにしたってこんなところにある鎖が普通の鎖なわけがないでしょう！ うかつすぎるとわよー！」

「……悪かったよ」

ぐうの音も出ない正論に万丈も素直に自らの非を認めざるを得ない。そこへオルガマリーの叫び声を聞きつけた戦兎とマシユが駆け付ける。

「何があつた!?!」

「二人ともご無事ですか!?!」

「万丈が罨にかかりそうになつたのよ」

「罨!?! おい万丈大丈夫なのか!?!」

「おお。所長のおかげで何とか」

戦兎はそれを聞いて安心した様子だったが、すぐに真剣な表情に変わった。

「所長、何か危険な予感がします。早くここから離れたほうが」

「残念。新鮮な獲物を逃がしてしまいました」

戦兎達4人の誰とも違う女の声がどこからともなく聞こえてきた。警戒して辺りを見回す4人だが、声の主と思わしき人物の姿は見えない。

「見知らぬサーヴァントに見知らぬマスター……それに若い男女……ああ……なんて

瑞々しい……」

再び女の声が響く。今度はもつと近くはつきりと聞こえた。

「あそこだー！」

万丈が土手の上の一点を指さす。万丈の指す場所に光が集まったかと思うと次の瞬間には黒いフードを頭から被り、足元まで届く長髪の妙齢の女性が立っていた。

人が思い描く完璧なボディスタイル。人間離れた美しい女性だが、その手にはあまりに不釣り合いな鎌のような先端をもつ槍を持っている。そして何より、その女性の纏う空気が彼女の美しさを恐ろしさへと変貌させてしまっていた。

『この魔力反応……間違いはない、彼女はサーヴァントです！』

「見ればわかるわよ！ それよりなんでもつと早く気がつかなかったの！」

『面目ない……直前まで魔力反応がほとんどなくて……』

「わざわざ霊体化して待ち伏せてたってこと？」

通信ウィンドウの向こうにいるロマニを叱りつけながら口にしたオルガマリーの疑問に答えたのは鎌を持った女性、サーヴァントだった。

「ええ。ここは私の狩り場……狩人が堂々と姿を晒すなどあまりに趣に欠けるでしょう？」

美しく、そしてゾツとするような冷たい声。だが、それよりも戦兎はサーヴァントの

言った言葉に引つかかった。

「獲物……?」

「そう、あなたも見たのではないですか? これですよ」

そう言つてサーヴァントは近くにあった石像の一つに頬を寄せる。

「中々良い出来だと思いませんか? この恐怖の表情を引き出すために少しばかり手間をかけたかいいがあつたというものです」

そう言つてコツコツと石像の顔を叩くサーヴァント。その物言いは自分が石像を創つたかのような言い方だった。

「石像が……獲物?」

状況が飲み込めない戦兔の隣でオルガマリーは納得した様子だった。

「なるほど……石化の呪法ね」

「石化つて……」

「神話や伝承に出てくる、その名の通り対象を石にする魔術よ。有名どころで言えばゴルゴーンとかね」

「見たものを石に変える目を持った蛇の? でもあれは神話でフィクションじゃ」

「あなた、説明を理解していなかったの? サーヴァントというのは信仰によつて生まれるの。それが実在したかどうかは重要じゃない。神話でもフィクションでもその存

在を信じる者がいればそれが信仰になるの」

戦兎はサーヴァントとよく似た存在を知っていた。先輩ライダーであるゴースト、彼の能力はマスターとサーヴァントのそれに近いものがあつた。彼の持つ眼魂には過去の偉人の魂が宿っている。ゴーストはその魂の力を借りて戦うのだ。

眼魂とサーヴァントは共に過去の存在の力を宿すという点では共通している。しかし、眼魂が歴史上の偉人、記録などにより存在が（ほぼ）証明された人物の魂しか存在しないのに対して、サーヴァントはフィクションの存在であっても広く知られていればそれだけでいいという。

これが意味するものは、サーヴァントになる存在は人間だったとは限らないということだ。つまり、今日の前にいる美女は――

「石化の魔眼を持つゴルゴーン？」

「そうとは限らない、けどその可能性は高いわね」

戦兎は改めて目の前の美女を見た。もし予想が正しければ目の前にいるのは伝説上の魔物、戦兎の知っている物語の挿絵にあるような姿とは大分違うが、ゴルゴーンだ。

「相談事は終わりましたか？ それではそろそろ狩りを始めましょうか」

余裕たつぷりにサーヴァントはそう言った。

「その前に……せつかくこんなにも生きのよい獲物が4匹も増えたことですし。景気づ

けに一杯頂きましようか」

そう言ってサーヴァントは手近な石像の頭に手をかけるとそのまま腕を振り払った。石像の頭がボールのように飛んでいき、頭のもげた首からは鮮血が噴水のように噴き出す。その血の噴水を全身に浴びながらうっとりとした表情を浮かべるサーヴァント。その様子を戦兔達は言葉を失ったまま見ていることしかできなかった。

命のやり取り、戦場に慣れている戦兔と万丈をしてもこれほどまでに猟奇的な殺人を犯す存在は初めてだった。

「っ！ 戦うしかありません」

4人の中で最初に動けたのはマシユだった。盾を構え、戦兔達の前に出てサーヴァントと対峙する。

「ああ……勇ましい……初々しい……」

前に出るマシユをサーヴァントは面白そうに眺めている。

「あなた、サーヴァント同士で戦うのは初めて？ では先達として教えてあげましよう」
そう言ってサーヴァントは手にした槍を曲芸のように手のひらでくるくると巧みに躍らせる。

「言動には気をつけなさい。戦う、と一度でも口にしたのであれば」

手の中で踊る槍を構え直し、サーヴァントの気迫が増していく。

「もう行為は始まっているのです！」

その言葉と共にサーヴァントの姿が掻き消える。そして次の瞬間にはもうマシユの目の前で槍を振り下ろしていた。

激しい金属音と共に盾と鎌が火花を散らす。二度三度と振るわれる槍を盾で防ぐマシユ。

「必死ですね……大変よい。でも気をつけなさい？」

構えた盾に刺突を繰り返しながらサーヴァントは言う。

「私の槍は不死殺しの槍……この槍で受けた傷はいかなる手段を持ってしても癒えることはない！」

その言葉にマシユとオルガマリーがサツと顔色を変えた。

「理解しましたか!? 少しでも受け損なえば！」

サーヴァントは執拗に何度も突きを繰り返しながら言葉も叩きつけてくる。

「あなたは一生、サーヴァントとし不出来になるのです！」

敵のサーヴァントの攻撃は単調な槍による突きだけだが、それを防ぐマシユは必要以上に強張っているように戦鬼は感じていた。それはきつとあのサーヴァントの言葉に原因がある。

「所長、あのサーヴァントの言ったことは本当なんですか!？」

「……分からない。ブラフかもしれない。でも、ありえない事じゃないわ」

「あの槍から受けた傷は絶対に治らないって？ そんなバカな！」

「いいえ、十分にあり得るわ。なぜなら、サーヴァントの武器だからよ」

意味が分からないといった様子の戦兎にマシユから目を離さずオルガマリーが解説する。

「サーヴァントの武器はそのサーヴァントの伝承や逸話になぞらえたもの。もしあのサーヴァントにまつわる伝承に「つけた傷が決して癒えない」「不老不死のものでも殺せる」そんな槍があれば、そういうった特性をあの槍は備えているのよ」

「そんな……ただ、そんな伝説があったというだけで!？」

戦兎はふざけるなど叫びたかった。オルガマリーの説明の通りだとしたらそれは空想が現実になることと同義だ。

想像はえてして現実より凄いものだ。漠然とした表現だが、想像上のものは現実的ではないものが多い。なぜなら想像には制限がないからだ。想像でなら赤ん坊だって10か国語を話せるし、光よりも早く移動できる。何だって出来る、想像であれば。

しかし現実はそのはいかない。物理法則、時間、倫理、能力、利益不利益、現実には無数の制限がある。それらの制限によってその人物の取れる選択肢は狭まっていき、最後に残ったものから選択することで人間は先に進む。

それは想像と比較すれば取るに足らないものかもしれない。想像では100出来る事も、現実では1も出来ないかもしれない。それでも諦めず、少しでも想像という理想に近づこうと努力する。僅かでも成果を積み上げ続けて科学は進歩してきたのだ。戦兔はそんな科学のあり方が好きだった。

それが何だ。サーヴァントという存在はそういう伝承があったから、などという曖昧かつ論理的ではない根拠だけでそれを現実のものにするという。科学を馬鹿にしていくとしか思えない。

「桐生戦兔！ 何をポーっとしてるの！」

目の前の理不尽さと自分の無力さに怒る戦兔の気持ちを見透かしたかのようなオルガマリーの叱責が飛ぶ。

「いい？ あなたはあなた自身がどう思おうとマシユと契約してマスターとなった瞬間から魔術師になったの！ 魔術師なら目の前の現実を否定せずに受け入れなさい！」

「あなたのサーヴァントは今、あなたのために戦っているのよ！」

指し示された先には敵サーヴァントとたった一人で戦い続けるマシユの姿がある。

自分は何をしているのだと戦兔は自らを恥じた。自らの常識が通じない敵など散々戦ってきたではないか。今更泣き言など言ってはいられない。変身できなくとも、今の自分出来る事をしなければ。

マシユはずっと防戦一方だった。あの槍から受けた傷は決して治らないというあのサーヴァントの言葉が真実ならば、それはもしこの戦いでマシユが腕に傷を負えば、例えこの戦いに勝ったとしてももう盾を構えることは出来ないということになる。それをマシユは恐れ、体が強張り反撃に転じられないのだろう。

今のところマシユは敵サーヴァントの攻撃を全て防いで入るが、槍の攻撃をその身に受けてしまえばそこから崩れる可能性が高い。早々に反撃に転じなければいずれやられてしまうだろう。

しかし戦兔の見立てではマシユよりも敵サーヴァントの方が素早い。下手な攻撃は反撃のリスクが高い。やはり何か別の一手が必要だった。敵サーヴァントに隙を作り、マシユに繋げる一手が。

しかし、どうやって？

良いアイディアが浮かばないまま戦況が動いた。敵サーヴァントが盾ごとマシユを力で強引に押し込んだのだ。僅かにグラついたマシユを盾のない側面からの横薙ぎが襲う。辛うじて槍の刃を避けたマシユだったが、敵サーヴァントは追撃の構えを取っている。態勢を崩したマシユは避けられない。

その時、マシユの盾の陰から躍り出た影があった。

万丈だ。彼はマシユが戦い始めてからずっと機会をうかがっていたのだ。

万丈はマシユの盾を利用して敵の視線を避けて懐に飛び込むことに成功した。敵サーヴァントも完全に意表を突かれて反応が遅れた。

「オラァー！」

懐に飛び込んだ万丈は全力の拳を敵サーヴァントの脇腹へと叩き込む。腕の振り、踏み込み、インパクト、全てが完璧だった。万丈の渾身の一撃は確かに敵サーヴァントを捉えた。

万丈の行動はその場にいた全員の度肝を抜いた。突拍子がなさ過ぎて戦兎達はおろか、敵であるサーヴァントも、カルデア指令室からモニターしていたロマニらスタッフたちでさえも固まっていた。

敵サーヴァントは自身の脇腹に突き刺さった万丈の拳をじっと見つめて動かない。好機と見た万丈は続けてもう一発拳を繰り出した。またしてもクリーンヒット。万丈のストレートパンチは再び敵サーヴァントの芯を捉えた。

まだ万丈が格闘技界に身を置いていた頃、どんな大男でも試合で万丈の拳を2発以上耐えた者はいなかった。ましてや華奢な女の体だ、耐えられるはずがない——万丈はそう思っていた。

「驚きました」

万丈の二発目の拳を受けたまま、敵サーヴァントは言った。その声は平静そのもの

で、苦痛の色は微塵も感じられない。

「まさか本当にただ殴るだけとは」

万丈に悪寒が走る。万丈は咄嗟に腕をクロスして防御の体制をとる。直後、クロスした腕の上から凄まじい衝撃が走り、万丈は後方へと吹っ飛んでいった。激痛の中、吹き飛びながら万丈が見たのは細く優美な足を振りぬいたサーヴァントの姿だった。

「万丈!」

吹っ飛ぶ万丈を戦兔が受け止めた。そのまま二人はもつれる様に地面に転がる。

「戦兔! 万丈! 大丈夫!」

「……腕が折れたかと思っただぜ……」

万丈はまだ痺れている腕をさすりつつ起き上がる。

「あんな細い体なのになんてパワーしてんだよ」

「万丈……この馬鹿!」

万丈の下敷きになっていた戦兔が万丈を押しつけて立ち上がる。

「サーヴァントは人間の姿をしたスマッシュのようなものだ! サーヴァントに生身で向かっていくなんて、無茶なことをするんじゃない! 人間とは比べ物にならないパワーを持っているのはマッシュを見てれば分かるでしょうが!」

「マジか!? じゃあ俺の拳も効いてなかったのか……?」

「その通りです」

意外にも万丈の疑問に答えたのは敵サーヴァントだった。

「生身で殴り掛かって来たことにも驚きましたが、まさか魔術による肉体強化もなしに来るとはさすがに面喰いましたよ。あまりにも何もないので、一瞬何か他に魔術を発動したのかと警戒してしまいました」

驚き、呆れ、嘲りを足して割ったような表情で敵サーヴァントが言った。

魔術の知識があるものならそもそもサーヴァントに挑んだりしないし、仮に挑むとしても十分な策を練る。そうでなければ無駄に命を散らすことになるからだ。サーヴァントからすれば生身で何の策もなく殴り掛かって来た万丈は、本気で殺すつもりで発泡スチロールの棒を振り下ろしてきた子供にも等しい。

「しかし結局無駄だったとはいえ、人間が私に触れたこと。いえ、無知ゆえだとしても私に「敵う」と思ったその驕りは許し難い」

敵サーヴァントはそれまでの嘲笑から怒気をはらんだ顔つきに変わった。戦兎達を庇う様に前に出たマシユと再び相對する。

「出来損ないのサーヴァントに己の分も理解できない馬鹿……聖杯戦争を勝ち抜くにはあまりにお粗末な布陣でしたね。その愚かさを呪って死になさい！」

『そうかい？ 馬鹿だ無謀だと言われても敵に向かつていく気概。俺は嫌いじゃないが

ね』

突如として場に響く新たな声。同時に敵サーヴァントが現れたのと同じ光と共に青い衣装に身を包み、手に魔法使いを連想させる長い杖を持った長身の人物が現れた。

「よう、ランサー」

「貴様……キャスター！」

キャスターと呼ばれたサーヴァントは頭を覆っていたフードを外した。フードの下からは精鍛な顔つきの男がニヒルな笑みを浮かべて現れたのだった。

特異点F 01D

三行でわかる前回のあらすじ

・オルガマリー所長の素人向け魔術講座

・初めてサーヴァント戦↓サーヴァントってチートじゃない？

・万丈のメガトンパンチ！↓効果がないみたいだ……

――

「出来損ないのサーヴァントに己の分も理解できない馬鹿……聖杯戦争を勝ち抜くにはあまりにお粗末な布陣でしたね。その愚かさを呪って死になさい！」

『そうかい？ 馬鹿だ無謀だと言われても敵に向かっていく気概。俺は嫌いじゃないがね』

突如として場に響く新たな声。同時に敵サーヴァントが現れたのと同じ光と共に青い衣装に身を包み、手に魔法使いを連想させる長い杖を持った長身の人物が現れた。

「よう、ランサー」

「貴様……キヤスター！」

キヤスターと呼ばれたサーヴァントは頭を覆っていたフードを外した。フードの下からは精鍛な顔つきの男がニヒルな笑みを浮かべて現れたのだった。

「なぜあなたが彼らの肩を持つのです？」

「なぜって……そりゃあ、決まってるだろ？」

「お前らよりマシだからだよ！」

その言葉を皮切りにキヤスターが指で空中に象形文字らしきマークを描くと、その文字が火の玉となってランサーへと襲い掛かる。火の玉は着弾と同時に爆裂し辺りに爆煙が広がる。その間にキヤスターは戦兔達と合流した。

「俺はキヤスターのサーヴァント。敵の敵は味方ってわけじゃないが、今は信頼してもらっていい」

「キヤスター？ それって名前？ それとも役職？」

「後で説明してあげるから黙って聞いてなさい！」

戦兔を叱りつけるオルガマリィ。

「お前さんがその嬢ちゃんのマスターかい？」

「あ、はい。桐生戦兎と言います」

「なら戦兎よ。お嬢ちゃんとそつちの兄ちゃんのガッツに免じて俺がお前のサーヴァントになってやる。仮契約だがな」

キヤスターは戦兎を見据えてそう言った。

「見たところお前も嬢ちゃんも素人だ。なら最初にお前らがやらなきゃならんのは見て知るこゝろだ」

「サーヴァント同士の間で戦ってやつをよく見てな」

爆煙が晴れ、姿を現したランサーとキヤスターが対峙する。

「理解に苦しみませぬ。肩を持つにしてもなぜあんな素人集団なのか」

「俺の勝手だろ。俺はあいつらが気に入ったんだ」

「まあいいでしょう。いずれ仕留めるはずだった予定が早まっただけのこと」

「これは聖杯戦争なのですからね！」

その台詞と共にランサーが自らの長髪をすくように広げる。広がった髪はぐんぐんと伸びながらその形を鎖へと変貌させていった。万丈を絡め捕ろうとした不自然な鎖、それはランサーの髪が変化したものだったのだ。

鎖はそれぞれが意志を持つかのようにうねりキヤスターへと殺到する。

キャスターは飛び上がり上空へと逃れたが、その動きはランサーに読まれていた。先んじて飛び上がり上を取っていたランサーの槍をキャスターは杖で受ける。地面へと叩き落されたキャスターは受け身を取って着地するが、すぐさまランサーの槍が迫る。今度は地面を転がって避けるキャスター。

逃げるキャスターをランサーが追う鬼ごっこが始まった。

「おいおい！ あのキャスターとかいうやつ、まずいんじゃないのか？ 追いつかれそうぞぞ！」

万丈が戦兔の肩を揺さぶる。その隣ではオルガマリーが険しい表情で戦いを見ている。

「当然よ。キャスターとランサーじゃステータスに差があつて当然なもの」

「ステータス？ 能力なら違いがあるのは当然なのでは？」

全く同じ人間が二人としないように、サーヴァントも個人個人でその能力に違いがあるのは当然なのではという戦兔の疑問にオルガマリーはそういうことではないと言つた。

「サーヴァントは与えられたクラスによつて本来の能力に補正がかかるの」

「与えられたクラス……さつきから呼んでいるキャスターやランサーとはサーヴァントの名前でなくクラス名？」

「そう。詳しい説明は省くけど、キャスターは魔術師。魔力を扱う能力にプラス補正がかかる代わりに筋力や俊敏性といったフィジカルにマイナス補正がかかる。逆にランサーは槍兵。近接戦闘に必要なフィジカルにプラス補正がかかる」

「それはつまり……」

その説明を聞いた戦兎はオルガマリーと同じような険しい表情になっていく。

「そう。キャスターがランサーと近接戦をするなんて自殺行為よ。元の能力に余程の差がなければ勝ち目なんてないわ」

「では一刻も早く加勢に行かなければ！」

「待つんだマシユ！」

マシユが盾を構えて駆け出そうとするもそれを戦兎が呼び止める。

「キャスターは言った。サーヴァント同士の戦いをよく見て学べと。つまりキャスターには何か作戦があるんじゃないか？」

あえて口に出して伝えなかったのはランサーの前で作戦がばれるのを避けるためだ。そしてキャスターを援護するならその作戦の邪魔をしてはならない。

戦兎はその天才的な頭脳をフル回転させてキャスターとランサーの戦いを観察する。先程から変わらずキャスターは迫りくるランサーの槍を交わして逃げ回っている、ように見えた。

「所長」

「何よ」

「キャスターの基本戦術を教えてください。聖杯戦争におけるキャスターの勝ちパターンも」

オルガマリーは戦兔の質問の意図を測りかねているようだが、簡潔に説明してくれた。

キャスタークラスは魔力操作と陣地作成による大規模魔術の行使が強み。陣地作成により自らを強化したり、敵を畏にはめることができる。そのためキャスターはあらかじめ自分に有利になる陣地を作成し、そこで戦うのがセオリーなのだ。

逆に近接型クラスに武器が届く範囲まで近寄られた場合、魔術を行使することが難しくなり負けは濃厚となる。

「キャスターの言葉を信じるなら、あいつは俺たちを助けに来てくれたことになる。俺たちがこのランサーの狩り場を通つたのは偶然。つまり、この場所での戦闘はキャスターにとって想定外のはず」

突発的な戦闘ならば事前準備はしていないだろう。ましてやここはランサーの縄張りのようなものだ。リスクを冒して敵のお膝元でわざわざ自分の陣地を作成していたとは思えない。

「(しかし、キャスターが勝つには自陣が必要。となれば考えられるのは)」
キャスターの火の玉を放った魔術。

反撃せず逃げ回る行為。

陣地作成。

「これまで集めた情報から読み取れるキャスターの目的とは。

「なるほど。そういうことか」

戦兎の頭の中で全ての情報が一つに繋がった。キャスターの目的、そして作戦のおおよそも予測がついた。

そして戦兎はそこから逆算して自分たちに出来る役割を割りだす。

「マシユ。今から言うことをよく聞いてくれ。作戦を伝える」

勝利への方程式。

それを組み立てるためのパラメータが出揃い、戦兎は高らかに宣言する。

「勝利の法則は決まった!!」

――

「逃げるだけで精一杯! 魔術を唱える暇もないようですね!」

逃げ回るキャスターに追い縋りながら槍を振るうランサーが笑った。

このキャスター、キャスタークラスの割に近接での動きが良い。しかしランサーであ

る自分に及ぶものではないとランサーは分析していた。仕留めるのに何の問題もない。

「(やつばキヤスターだと体が重いわ。俺もランサーで呼ばれていりゃあな)」

自分の逸話を考えればランサーとして現界する可能性の方が遥かに高いと思うのだが、何がどうして今の自分はキヤスターだった。

「(さて、ここまで仕込みは上々。後の問題は仕上げだけ。だが、そろそろ奴さんも本腰を入れてくる頃合いか)」

ランサーを仕留める目星は付いた。残るは最後の一手のみ。

しかし、その一手が問題だった。キヤスターの策を完璧に成功させるにはランサーの動きを一瞬だけでも止める必要がある。

キヤスターの策は奇襲に近い。失敗すれば二度目はない。確実に仕留めるためにもランサーの動きを止めるのは必須だ。

「(だが、どうやって止める?)」

キヤスタークラスの体ではランサーの攻撃をいなして反撃することは難しい。おまけに敵もそろそろ本気を出してきた。攻撃はさらに激しくなりますます止めることは難しくなってきた。

「もう手がないようですね! これで終わりです!」

キヤスターに止めを刺さんとランサーがこれまでで最も早く、魔力の籠った槍を振り

上げる。

「(クソツッ! こうなりややるつきやねえか!)」

キャスターは覚悟を決め、槍を受けようと杖を構えた。

だが、ランサーの槍は突如割り込んできた壁に弾かれることになる。

「何っ!?!」

「うわあああッ!!」

キャスターとランサーの間に割り込んだマシユの盾がランサーの槍を弾いた。そのまま雄叫びと共にマシユは渾身の力で盾を振るい、ランサーを押し返した。

「小癩な真似を!」

後方へと飛ばされたランサーは難なく着地するとマシユを苦々しく睨む。

「キャスター! 今だ!」

そこへ戦兎の号令が飛んだ。

――

マシユがキャスターを庇う少し前。戦兎はマシユら全員を集めて言った。

「おそらくキャスターは闇雲に逃げ回っているわけじゃない」

「キャスターは大きく円を描くように逃げ回っている。そして逃げるときには必要以上に地面を転がっている」

「それはなぜか？ おそらく敵にバレないよう自然に手を地面につけるためだ。そしてそれは反撃のための仕掛けのはず」

それが戦兎の観察結果だった。そしてここからが観察結果を元に戦兎が導き出した作戦だ。

「このまま行けばキャスターはあの広場のあの辺りを通るはずだ」

戦兎は逃げ回るキャスターが現在いる場所と自分たちのいる場所の中間辺りを指さす。そこは最初にキャスターが手を付きながら逃げ回り始めた場所だった。

「マシユはそこへ先回りして待機。合図を待つてランサーの攻撃に割り込んでキャスターを守るんだ。キャスターが魔術を使う時間を稼ぐと同時にランサーを遠くへ弾いてくれ」

「狙いはあそこだ」

— —

「キャスター！ 今だ！」

戦兎の号令にキャスターは獰猛な笑みを浮かべる。

「やるじゃねえか戦兎よ！ 魔術素人とは思えんぜ！」

キャスターは手を地面に叩きつけ、魔力を流す。

流し込まれた魔力がスイッチとなり、一瞬で魔法陣が浮かび上がった。

「なっ!？」

「ルーンに詠唱なんていらねえっての! 勉強し直してきやがれ!」

驚くランサーを笑いながらキャスターはさらに魔力を籠める。魔法陣が赤く輝き、その中心、ランサーの足元から巨大な火柱が立ち上った。

「ぎゃああああ!」

火柱に焼かれ、灰となったランサーの肉体が崩れていく。崩れた肉体は黒い粒子と共に虚空へと消え去った。

「ふう。一丁上がりってな」

杖を掌でくるくると回しながらキャスターが言った。

「嬢ちゃんもよくやったな。ナイスタイミングだった」

「いえ。私はマスターの指示通りに動いただけですから」

「それなんだがよ」

「戦兔よ。お前、俺の魔法陣を見抜いてたのか?」

キャスターは振り返るところこちらへ向かってきた戦兔へと問いかける。

「いいや。如何に俺が天才物理学者と言っても魔術については素人。そもそも魔法時そのもの知らない俺に見抜けるわけがない」

その言葉にキャスターは目を見開いて驚いた。戦兔の作戦は魔法陣の特性を理解していなければ立てられないものだったからだ。

「だけど所長から聞いたキャスタークラスの特性とキャスターの魔術を見ればおおよその見当は付けられる」

そう言つて戦兔は指を立てながら自らの推理を披露し始めた。

「最初に見たキャスターの魔術は空中に記号を描くことで発動していた。つまりキャスターの魔術は詠唱ではなく刻印によつて発動するということ」

「そしてキャスターは逃げ回る際に円形に等間隔で手を付いていた。刻印方式の魔術とこの情報を組み合わせれば、それが何らかの魔術の記号を描いているものと推測できる。では何の魔術か？」

「キャスタークラスは陣地作成により戦闘を優位に進めると聞いた。ならば作成しようとするのは陣地の魔術のはず。この状況で発動する魔術は十中八九ランサーを仕留めるための罠。さらに円形であればその中心が最も力が集約すると考えるのが道理」

「よつて俺はマシユを円の終点で待機させ、やってくるキャスターを守り、ランサーを円の中心付近まで押し込むよう頼んだ。結果は見ての通り」

以上説明終わり！ と戦兔は締めくくった。

「ほう……」

黙って説明を聞いていたキャスターはじろじろと戦兔を頭から足先まで観察している。

「魔術も魔法陣も知らないのによくそこまで考えが至ったもんだと感心するぜ。魔術に関しちやてんで素人みたいだが……なるほど」

「頭の方はキレるみたいだな」

キャスターは面白そうに笑った。

—・—

「さて、それじゃあ改めて自己紹介とでもいこうかね」

ランサーの狩り場から少し離れた所に街を両断する大きな川を繋ぐ大橋があった。

その高架下に移動した戦兔達一行は改めて互いの情報を交換をしていた。

「最初に言った通り、俺はこの聖杯戦争におけるキャスターのサーヴァントだ。仮契約しといて悪いが真名は明かせねえ」

「真名?」

「そのサーヴァントの本名のことよ。サーヴァントがクラス名で名乗るのは自分の真名を隠すためでもあるわ」

「何で名前を隠すんだよ?」

万丈の疑問にオルガマリーが答えた。

「サーヴァントにとって自分の素性を明かすことはそのまま弱点を晒すことになるからよ」

よくわかっていない戦兔と万丈にオルガマリーがやれやれと言った様子で説明を続ける。

「何回も言ったようにサーヴァントは人々の想念、信仰によって成り立つ存在。そのため人々の持つイメージによってその在り方が決まってしまうことがあるの。だから大抵の場合はそのサーヴァントにまつわる神話や逸話通りの人物として現れるわけだけど、事実はどうあれ伝承通りの人物として現れるということとは」

「そうか！ 弱点も伝承通りのままってことか！」

戦兔は合点がいったと指を鳴らし、オルガマリーは戦兔の言葉に頷いた。

「どういうことだよ？」

「つまり、仮にお前がサーヴァントになったとするだろ？」

「俺が!？」

「仮にって言ったでしょうが！ んで、俺がお前の伝記を書いていたとする。その伝記を元にお前はサーヴァントとして召喚された」

フムフムと聞き入る万丈。

「その伝記で俺はお前が大のプロテイン嫌いだと書いた」

「はあ!？」

「しかもお前の死因はプロテインアレルギーによるショック死だ」

「おい! 嘘ばかり書くくんじゃねえ! プロテインの貴公子たる俺がプロテインアレルギーにないけないだろ!」

自他ともに認めるプロテイン好きの万丈は怒り心頭と言った様子だ。

「そうだな。嘘だ」

戦兎はあつさり認めた。

「だけど、もしお前がサーヴァントになったら弱点はプロテインになるぞ」

「はあ!?! 何でだよ!?!」

「俺の書いた伝記を読んで大勢の人がお前はプロテインに弱いと思っているからだ」

「マジかよ!?! 嘘っぱちなのに!?!」

「事実とは違っても、嘘の方を信じる人が多ければそういう弱点がつくんだよ、サーヴァントは」

納得いかねえとぼやく万丈。戦兎もその気持ちは理解できた。事実とは関係なしに他者の想像や認識によって理屈も原理も蹴飛ばしてありえない現象を引き起こすサーヴァント、そしてそれを成り立たせてしまう魔術。

一科学者として未だに信じられないところがあるが、自分たちよりも遥かに魔術に精

通する人間がそうだというのなら認めるしかない。

「もし相手サーヴァントが万丈龍我だと気がついたら間違いなく敵はプロテインを用意する。だってプロテインが弱点だって誰でも読める本に書いてあるからな。だから相手に自分の正体をばれないようにするんだよ」

「まあそう言うことだ。知名度の高いサーヴァントほどその能力は高くなる。しかし同時に弱点が割れ易くもなる。サーヴァントってのは強力だが、不安定な所も多い。お前さんもマスターなら覚えておきな」

キャスターはそう締めくくった。

戦兎は改めて自らの手の甲に刻まれた令呪とマシユを見やった。

「話を戻すが……まずはそちらの話を知ろうか？ 安心しな。そっちの事情に口を出す気はない。召喚された時代に深く干渉しないのがサーヴァントの鉄則だからな」

戦兎達は自分たちの事情を説明した。この街に特異点となった原因を調査しに来たこと、その原因が聖杯戦争にあると推測し山を目指していたことを説明した。

「なるほどね……んじゃあ、今度はこっちの事情を説明しようか。と言っても、どこから話そうかね？ いや、俺もこの事態を全て把握しているわけじゃないんでな」

しばらく思案顔を続けていたキャスターだったが、結局よい切り出し口が思い浮かばなかつたらしい。

「まあ、最初からありのままを話すか。どう受け取るかはそつちに任せる」
そう言つてキャスターは事の推移を語り始めた。

「この街で始まつた聖杯戦争は最初こそ通常通りだった。7人のマスターに7騎のサーヴァント。聖杯をかけて魔術師がサーヴァントを従えてしのぎを削るつてヤツさ」

「7組のマスターとサーヴァント？ それはランサーやキャスターのようなサーヴァントが7騎もいるつてこと？ それは全部違うクラスなのか？」

ようやくキャスターの話が始まつたかと思つたが、さつそく戦兎が疑問を投げかける。

「あなたね……少しは黙つて話を聞いてもらえないの？ 何回人の話の腰を折るのよ？」

オルガマリーが呆れ顔で戦兎を窘める。

「あー、そつからか。お前さん、本当に何も知らないんだな。そこの姉ちゃん、説明してやんなよ」

「私が？ 仕方ないわね」

キャスターに指名されたオルガマリーは仕方ないと言いつつ、戦兎の質問癖にはもう慣れたもので丁寧に説明を始めた。

サーヴァントは召喚の際、クラスというカテゴリーを与えられて召喚される。これは

英霊をオリジナルのまま召喚することが不可能であるため、クラスというカテゴリーに当てはまるよう英霊の一部を限定して召喚するためである。クラスは主に七つ。セイバー、アーチャー、ランサー、キャスター、ライダー、アサシン、バーサーカー。他にも例外的なクラスが存在するがそれらはエクストラと括られる。ちなみにマシユのクラスはシールド。エクストラクラスの一種だ。

聖杯戦争では主である7つのクラスから1騎ずつ召喚され、マスターとサーヴァントのペア7組のバトルロワイヤルが行われる。最終的に勝ち残った1組が聖杯を手にし、願いを叶えられるという。

つまり、マスターは小型端末で容量が少ないからサーヴァント本体というクラウドサーバーに保存されたビッグデータ全てをダウンロードできない。そのためクラスという特定のカテゴリーに当てはまるデータのみを抽出することで容量を削減してからコピーしてダウンロードする、みたいな？」

説明を聞いた戦兎が内容を噛み砕こうとサーヴァントの召喚を現代のネットワークに例えてみる。

『概ねそれであっているかな。サーヴァント召喚をそんな現代的な例えで説明した人間は戦兎が初めてだろうけどね』

通信先からロマニが苦笑交じりで肯定する。

「でもなんで7騎全てを違うクラスにしなければならないんだ？」

先程の説明の中にはサーヴァントの召喚クラスはほぼランダムであり、早い者勝ちだというものがあつた。セイバークラスを召喚したくとも先にセイバーのサーヴァントが召喚されていればもうセイバークラスを召喚することは出来ない。

それではフェアでないし、召喚の際にクラスに当てはめることが英霊の容量削減のためなら別にクラスが重複してもいいのではないかと戦兔は言っているのだ。

「そこまでは知らないわよ。この聖杯戦争のシステムを最初に構築した魔術師がそう定めたから、としか言えないわ」

とはオルガマリーの談。どうやら聖杯戦争というシステムには制作者しか分からないブラックボックスが多いようだった。

「とにかく、7組のマスターとサーヴァントが揃っていざ戦争開幕となった直後のことだ。一夜にして街が炎に包まれ、人間も大半が消えた。残ったのはサーヴァントだけだった」

「経緯は俺にも分からねえ。しかし、これは明らかに聖杯戦争とは違うものだ。サーヴァント全員が思ったはずだ。一部のサーヴァントは聖杯戦争の中断を提案した。それ位に異質で異常な事態だったんだ」

ところがだ、とキヤスターは続ける。

「そんな中で聖杯戦争を続ける奴が一騎だけいた。セイバーの奴だ。奴さん、水を得た魚のように暴れ始めてよ。俺以外の全てのサーヴァントを倒しちゃった」

「倒されたサーヴァントは完全に消滅させられたバーサーカーを除いて退去することなく黒い泥のようなものに汚染され、勝手気ままに動き出した。そして汚染されたサーヴァントは精神が狂って狂暴化するみたいだな。お前らも見ただけならもう少し穏やかな奴であの程度の罠に易々と引っ掛かるような奴じゃなかったんだが、狂暴化して知能は下がったみたいだな」

おかげで助かったけどよ、とキャスターは続ける。

「黒くなつたライダーとアサシンはあんたらと会う前に今度こそ俺が倒した。そしてついさつきランサーを撃破。残るはアーチャーとセイバーのみ」

「つまり、その2騎を倒せば」

「聖杯戦争は終わり、そして大聖杯が現れる。お前さん方が探している異変の原因があるとしたらそこだろうな」

大聖杯、それが特異点の原因として一番可能性の高いもの。

「その大聖杯とやらは聖杯戦争が終わらないと現れないのか?」

「現れない……:というよりも起動しない、といったところか。もの自体はあるから調べることが出来る。だが、別の理由でそれは無理だ」

「……その理由は？」

「この土地の心臓、冬木大洞穴の奥に大聖杯はある。そしてそこはセイバーの根城でもある。奴を倒さなきゃ調査は無理だろうぜ」

— —

戦兔達の目的地は以前変わらないものの、そこへ向かう一行に新たな仲間、キヤスターが加わった。

キヤスターは霊体化と呼ばれる、幽霊のような霊的存在になり、物理的に干渉されない・出来ない状態になる能力↑ナニソレ？（戦兔談）、サーヴァントの標準的能力を生かして斥候役を務めてくれている。そのおかげなのか今のところ敵に遭遇していない。

キヤスター曰く、残った敵サーヴァントのアーチャーは皮肉屋で慎重なヤツらしく、アーチャークラスらしく遠距離から攻撃を仕掛けてこちらの消耗を狙ってくる可能性があるとのこと。その攻撃手段を聞く限り、戦兔が最初に受けた砲撃もそのアーチャーの攻撃によるものらしかった。

「最も、元々奴の攻撃を防げる盾の嬢ちゃんに俺が加わったから遠距離攻撃を仕掛けて

も魔力の無駄と判断して待ち構えている可能性もあるがな」

キャスターのその言葉が正しかったのか、道中ではアーチャーの攻撃らしきものは一度もなかった。そうなると洞窟までの道中は非常に安全であり、会話の余裕も生まれてくる。

「そういえば所長つてまだ若いのにカルデアの所長を務めているなんて凄いですよね」

戦兔が会話を切り出した。これまでの道中は警戒のため終始無言であったが、やはり終始無言はつらいものがあつた。

「俺は魔術に詳しくないですけど、カルデアが相当な規模の組織であることは分かります」

それは戦兔としては社交辞令のようなもので、会話の取っ掛りになればいいな、程度の意味合いしかなかった。だが、そんな戦兔の言葉をお世辞と捉えたのかオルガマリーはそっけなく返す。

「別に。私はお父様からカルデアを引き継いだだけだから」

素っ気なくそれだけを言つて会話を切り上げてしまふ。その返答は如何様にも受け取れるもので、そこからオルガマリーの心情を読み取ることは困難だった。

もう何度も同じような質問をされ、その度に同じ返答を繰り返してきたのだろう。その返答はプログラムの応答のように機械的で無感情だった。

それは暗にもう話しかけるな、と言っていることは戦兔にも理解できた。だが、戦兔は空気が読めても興味を優先する男。父親から引き継いだ、という言葉に関心を抱いた戦兔は場の空気を無視して話しかけ続ける。

「父親から引き継いだってことは、カルデアは親族経営の研究所か何かなのですか？」
「そういえば国連みたいな公的組織も関与しているみたいですけど、国連は魔術の存在を把握しているんですか？」

戦兔の質問を聞いても戦兔の先を歩くオルガマリーは答えない。答えるのも面倒だと振り返りもしなかった。

「血族と言えば魔術師の家系ってみんな魔術師なんですか？」

「お父さんがカルデアの先代所長だったんですか？ 今どこに？」

「お父さんも魔術師？ やっぱり優秀な人だったんでしょうね」

『あー！ まずい!!』

次々と質問が飛び出す中でそれを聞いたロマニが通信越しに声を上げた。

何が？ と戦兔が返す前にそれまで無視を決め込んでいたオルガマリーが突然反応した。

「お父様は死んだわ」

短く突き放すような返答。その声は震えていた。それは荒ぶる感情を必死に押さえ

つけようとしているように戦兎には思えた。

空気を読まない戦兎でもさすがにそれ以上踏み込むことは躊躇われた。これ以上の追及は彼女の逆鱗に触れる。オルガマリーに見えないよう、通信ウィンドウの向こうでロマンも手を×の字にクロスしている。

結局それからオルガマリーが口を開くことはなかった。誰も声を掛けられず、全員が黙り込んで荒れた道路を進んでいくこととなった。

—

それからしばらく歩いていくと、坂の上に立つ大きな建築物が見えた。どうやら学校のようなだった。まるで長い間放置されていたかのように荒れ放題の学校であったが、キャスターの話が正しければこの学校もついこの間まで大勢の若者が通っていたはずである。

「なあ、少しこの学校で休憩しないか？」

戦兎が提案する。

「ここまで歩き詰めだったし、いざという時のために体力を回復しておかないと」

『僕も戦兎の意見に賛成です。サーヴァントであるキャスターやマシユはともかく、人間である三人は体力に限りがありません。ここなら身を隠せる場所も多いし、雨風も防げる』

戦兎とロマニの言葉にオルガマリーが反論しようとして口を開くが、先んじて戦兎が指を立ててそれを制した。

「それに！ キヤスターの言葉通りならこの学校、ひいてはこの街の施設はついこの間まで通常通り運営していたことになる。ならまだ水道も使えるかもしれないし、学校なら災害時の備蓄食料もあるはず。それを手に入れるためにも休憩しましょう」

戦兎の言葉にオルガマリーは少しの間迷っていたようだが、最後には頷いた。こうして戦兎達一行は学校へと足を踏み入れた。

学校に入るとキヤスターは屋上へ偵察と警戒に行き、さつそく戦兎と万丈は学校の備蓄品を探しに出かけた。

「おい戦兎！ あったぞー！」

「お、でかした万丈」

万丈が抱える段ボール箱には携帯食とペットボトル飲料水が詰まっている。戦兎は他から見つけてきたリュックサックに人数分の食料を詰めていった。

「なあ戦兎」

「ん、何よ？」

別のリュックに食料を詰めながら万丈が話しかける。

「……って本当に新世界なのか？」

それはずっと気にかかっていたことだった。崩壊直前の世界を再生させるために仲間全員が命を懸けて戦ったはずなのに、新たな世界もまた破滅の危機に見舞われている。

何でこんなことになっているのかと疑問に思うのも当然だった。

戦兎は先に拾っておいた紙とペンにさらさらと文字を書き連ねる。

『そのはずだ』

『それと俺たちの会話は記録されているかもしれないから紙に書くぞ』

万丈は疑問だらけのまま言われた通り筆談に応じた。

『なんで記録されたらまずいんだよ？』

『馬鹿だな。新世界の創造主です、なんて言ったら信じて貰えないどころか頭がおかしい人扱いされるに決まっているだろう』

まるで実体験のように自信たっぷり宣言する戦兎。そんな戦兎へ万丈が返信する。

『馬鹿↑これなんて読むんだ？』

『バカ』

万丈は言葉なく怒りながら力こぶを作ってパンパンと叩いている。どうやら筋肉をつける、と言いたいようだ。

『細かい話は後でゆつくりしてやるから。とにかく今は新世界のことは誰にも言うなよ』

？ 前の世界のことだ』

万丈は事情がよく呑み込めていないようだったが、戦兎の言う通りにすることにした。黙って頷く万丈を見て戦兎もまた神妙に頷いた。

戦兎もまた万丈と同じ不安を抱えている。だが今はこの特異点の問題を解決することが最優先だ。これを何とかしない事には明日を無事に迎えられないのだから。

確かに、今はこれ以上不安の種を撒くべきではない。

特に万丈龍我は割り切ることが苦手のようだし、下手に情報を与えると混乱して危険だ。

だがそれは問題を先送りしているだけなのを忘れるなよ。

分かっている、と戦兎は呟き筆談に使った紙をビリビリに破いて捨てた。

特異点F 01E

三行で分かる前回のあらすじ

- ・ キャスターV Sランサー「これが聖杯戦争だ！」
- ・ 祝「勝利の法則は決まった！」
- ・ 戦兔が所長の地雷を踏む

――

「……眠れない」

オルガマリーは学校の保健室に設置されたベッドの上で呟いた。

戦兔達と別れた後、オルガマリーは何気なく校内を見て回っていた。ロマニたち管制室の調査でこの学校内に危険がないことは分かっていたので、一人でも大丈夫だと思っただのだ。

「これが学校……」

学校を見回りながらオルガマリーは何ともなしに呟いた。

オルガマリーは魔術社会における最上級の名家の生まれだ。教育は全て超一流の家庭教師が担当していたため学校に通った経験はなかった。一応ロンドンにある魔術の学び舎、時計塔に籍を置いていたこともあるが、あれは学校と呼ぶにはあまりに不健全であろう。

生まれて初めて入った学校はしかし、既に廃墟も同然の荒れようだ。本来ならここには大勢の学生が詰めて教育を受けていたはず。先生、同級生、友人、それに恋人。様々な人間模様が学校という社会のミニチュアには詰まっているらしい。

らしい、というのもオルガマリーは知識として知っているだけで体験したわけではなからだ。そもそも学校に限らずともオルガマリーには友人らしい友人はいなかった。

別に話し相手がいないわけではない。しかし、他愛のない会話に花を咲かせたり、用事もないのに集まってただお茶会をする、そんな損得勘定の絡まない人間関係にある知り合いは一人もいない。そんな相手は必要ないと教えられて育ち、彼女自身もそう思っていた。

しかし、もしこんな平凡な学校に通っていたら……そんな人生を送っていたら……自分にも友人が出来たのだろうか。そしてそんな友人なら自分のSOSに気づいてくれただろうか。

そこまで考えたところでオルガマリーは頭を振った。

無意味な仮定だ。こんな下らないことを考えるなんて、どうやら自分は相当疲れているらしい。

ちらりとあたりを見回すと、保健室と書かれた札のついたドアがある。開けてみるとそこには薬品棚とベッドが並んでいた。オルガマリーはベッドに積もったほこりを払うと、その上に腰掛ける。

「少し休もう……休んで、また頑張らないと……私がやらないと……お父様の代わりにならないと……」

そう自分に言い聞かせながらベッドに横たわるオルガマリー。

しかし、眠ろうと目を瞑っても眠気は一向に襲ってこない。ここまでの道中で体力も気力もすり減らしているはずなのに

やっぱり、とオルガマリーは思った。

父親の自殺から今日までともに眠れた覚えがない。どんなに疲れていても、どれだけ入念に睡眠をとる準備をしても決して眠れなかった。あんまりにも眠れないので軽い睡眠魔術を使わなければならない程だった。

ここ最近カルデアでのファーストミッション、レイシフトの実行が決まり目の回る忙しさだった。激務を終えていざ眠ろうとしても不安や緊張から悪い未来ばかり想像してしまい気分が悪くなって眠れない。睡眠魔術を使って眠っても思う様に回復せず、

疲れを残したまま次の日を迎える。疲れが残っているから神経質になって小言や怒声が増えてしまう、の悪循環だった。

今も目を瞑つても眠気は一向にやつてこない。仕方なしに自分で睡眠魔術をかけることにした。効果時間を調整すれば短時間で目を覚ませる。いざとなればロマニラカルデア指令室からの通信もあるだろう。

魔術が発動し、オルガマリーは瞼を閉じて睡魔に身を任せる。

睡眠魔術が効いている間だけ、彼女はあらゆる重責から解放される。目が覚めるまでは何も考えずに済む。だが、今回は具合が違っていた。彼女は今、真つ暗闇の中で一人ぼつんと立っている。目が覚めたわけではない。覚めたのなら目に映るのは保健室のはずだ。

これは夢？

睡眠魔術を使つて夢を見たことはこれまで一度もなかった。だが、この状況は夢以外に考えられない。

しかし、夢の中にしては不思議と意識がはっきりしている。

まさか……軽度の睡眠魔術とはいえ、レイシフト先で精神操作系の魔術を使ったから予想外の影響が？

少なくともオルガマリーは今自分が置かれている状態を考察出来るほどには頭も働

いていた。夢の中でこれ程はつきりと思考が出来るものなのか？

その時、オルガマリーの耳に微かに誰かの話声が聞こえてきた。何を言っているのか分からない程に小さな囁き。それは自身を取り巻く闇の中から聞こえてくる。

オルガマリーは気味が悪くなり、辺りを忙しく見渡した。だが、どれだけ目を凝らしてもこの世界には見通せぬ闇しかない。

囁き声は徐々に大きくなり、オルガマリーを取り囲むように周り中から聞こえてくるよう鶺鴒になった。

『あれがアニムスファイア家の次期当主……いや、もう現当主か』

『頑張つてはいるが、やはり先代と比べると……』

『あの調子ではせっかくのカルデアもまともに運用できるかどうか……』

名も知らぬ人間たちの失望した声。

『自殺だつて?』

『どうせ禁呪か何かに手を出したんだろうさ。そうでなきゃカルデアなんてものを一代で建てられるはずがない』

『ロードといったって天体科のだろうか？ 根源への到達を諦めて星を眺めているだけの家がロードだなんて最初からおかしかったのさ』

顔も見なかったことのない他人の嘲笑。

『マスター適正がない？ とんだ欠陥品ではないか！』

『ここまで金と時間を費やしたカルデアが今更使い物になりませんじゃ済まんぞ！』

『娘の器量では到底まとめ切れるものじゃない』

『カルデアはもうお終いだ！』

声も聞いたことのない野次馬の罵詈雑言。

影たちは決まつて最後に皆口を揃えてこう言った。

『あの父親とは似ても似つかぬ』。

オルガマリーは顔を青ざめて理解した。

これは夢だ。とびっきりの悪夢だ。自分を殺すためだけの悪夢だ。

今も昔も自分を取り巻き続け、決して逃がしてはくれない悪意が形を得て、とうとう自分を殺しにきたのだとオルガマリーは思った。

それまで辛うじて心の奥底に仕舞い込み蓋をしていた負の思念が一気に溢れ出す。心に巣くっていた不安や焦り、恐怖が周囲の闇に同化して闇はますます濃くなつていく。

幻影を振り払おうと目をぎゅつと強く瞑り、耳を塞ぐ。消えろ、消えろと一心に念じた。すると、それまでいた幻影たちがスーッと消えていった。

代わりに今度は先ほどよりも小さな幻影が大勢現れた。他に違う点は先ほどまでの

幻影は一樣に闇そのもののように真つ黒だったのに対し、今度の幻影たちは真つ白なことだろうか。子供ほどの背丈の幻影たち、その中から影が一つ前に出る。

『なぜ私たちは生まれたの？』

小さな女の子の影がかすれた声でそう言った。不揃いな薄紫の前髪のせいで片目の隠れた少女だった。

オルガマリーはその少女が誰だかすぐに分かった。そして、周囲の子供たちの影が何なのかも。

『なぜ私たちを作ったの？』

『なぜ』

『なぜ』

『なぜ』

『なぜ私たちは死ななければならなかったの？』

オルガマリーを取り囲んだ影たちはなぜを繰り返す。その言葉の意味をオルガマリーは理解できる、理解できてしまう。だが、返せる答えはない。返せるはずがない。

影たちがオルガマリーへ向かってにじり寄りながら、その白い手を一齐に伸ばす。それはまるで黄泉への手招きのようだった。

取り囲まれて逃げ場のないオルガマリーはその場にへたり込んでしまう。

もう嫌だ。どうしてこんな目に遭わなければならないの。私が何をしたっていうの？

助けて。

お願いだから誰か助けてー

「所長、どうしました？」

影たちとは違う、はつきりした声。

へたり込んだオルガマリーが突然足元から聞こえてきた声に恐る恐る目を開くと、足元にはいつのまにか真っ赤な兎がいた。長い耳をピコピコと揺らしながらオルガマリーを見上げている。

初めてみる兎のはずなのに、妙な既視感があった。

「所長、大丈夫ですか？」

兎の発した聞き覚えのあるその声にオルガマリーの意識は急速に現実へと引き戻された。

鉛のように思い瞼をこじ開けると、そこは見覚えのある保健室だった。

「うなされていたので思わず声をかけたんですが……大丈夫ですか？」

「あなた……桐生戦兎……」

オルガマリーが横になっていたベッドの脇に戦兎が心配そうに立っていた。

「……ここは何しているの?」

「俺は医薬品を探しに来たんです。保健室なら使えるものがあるかもと思って」

そう言つて戦兎は保健室の棚を漁り始める。消毒液、絆創膏、痛み止め、包帯など使えそうなものをリュックに仕舞い込んでいく。

「所長はお休みですか? すぐに出ていくんで、ちよつと待つて下さい」

「……いいわよ、別に。どうせ眠れないし」

オルガマリーは気怠そうに身を起こす。

「どうせつてことは不眠症か何かですか? やっぱりカルデア程の組織を纏める立場になると、気苦労も多いんでしょうね」

「……そうですね。どこかの誰かさんみたいに何も分かってない無知な連中の相手ばかりで胃に穴が開きそうよ」

暗に自分のことを言っているのだろう。辛辣な物言いに戦兎も思わずたじろぎながら面目ない、と頬を搔いた。

一方のオルガマリー自身も嫌味が過ぎたと思つているのかばつの悪そうな顔をしている。しかし、今更謝ることはもつとばつが悪い気がした。

いたたまれない雰囲気だ。もつともこの雰囲気はオルガマリーにとつてはいつものことでもあつた。棘のある物言いしか出来ない自分は誰と話してもいつもこうなつて

しまう。そして相手はそそくさとこの場を逃げ出し、陰険所長と陰口を叩くのだ。

どうせこいつも「それじゃあ、自分はこれで……」などと言つてこの場を離れるのだらうと、オルガマリーは思つていた。

そしてまた自分は独りになる。

「本当に申し訳ないと思つています。偶然とはいえ、魔術を知らない素人が所長が父親から引き継いだ大切な仕事に紛れ込んじやつて。戦闘員である俺に力があれば皆を安心させてあげられるのに」

科学なら自信があるんですけどね、と戦兎はすまなそうに言つた。

「……あなた、何を言つているの?」

一方オルガマリーは予想外過ぎる戦兎の言葉が飲み込めなかつた。

今回の件に関しては戦兎に落ち度はない。

魔術知識がないことを承知で彼を数合わせのためだけに今回のミッションへと選出したのはカルデア、ひいては所長である彼女だ。素人だからと戦兎に責められる謂れない。むしろ責められるべきは爆破テロを防げず、戦力を失わせてしまった彼女の方だ。

だからこそ彼女はずっと怯えていた。生き残つたカルデアスタッフや戦兎達、そしてマシユからお前のせいだと責められるのではないか、無能と罵られるのではないかと。

強気な態度は虚勢を張っていただけ。弱気な所を見せたらたちまち自分は責任追及的にされる。彼女はずっとそんな世界で生きていたからよく知っている。

なのに、目の前の桐生戦兎という男は彼女を責めるどころか自身の無力さを謝っている。

なぜ？ どうして自分を責めない？ 何を企んでいる？

猜疑心が自己防衛のためにオルガマリーの心を頑なに、そして攻撃的にする。

「あなたは本来戦力として数えられていなかった人間。レイシフト先で味方のサーヴァントを一人でも多く召喚するために集められた、いうなればサーヴァントを釣るための餌よ」

「思いあがらないで。戦闘員としてなんて、最初から誰も期待してないわ。それとも何？ 日本人特有の謙遜ってやつなのかしら？」

「それとも同情？ 生憎だけど、あなたに同情されるほど私の背負っているものは安くない。魔術を知らないあなたには理解できないかもしれないけど、今回のミツシヨンやレイシフトは魔術史に残る偉大な事業。他全てのロードやアトラス院ですら成しえない偉業なのよ？ お父様、いえアニムスファイア家の威信がかかった今回のミツシヨン……あなたなんかの理解が及ぶ話ではないの！ 身の程を弁えなさい!!」

息を荒くしながらオルガマリーが跳ね除けるように言い切った。同時にオルガマ

リーの心の内では後悔が渦巻く。

ああ、どうしてこんなことを言ってしまうのだろう。こんな風にしか言葉が出てこないのだろうか？

あんまりない方だった。こんなことを言われてはどれだけ穏やかな人間でも腹に据えかねるだろう。

本当は怖かっただけなのだ。目の前の男が何を言っているのか分からないから。何を考えてそんな言葉をかけるのか理解できないから。内心では私を馬鹿にしているのではないかと疑ってしまう。まるで精一杯吠えて威嚇する子犬のように臆病な自分。

もう戦兎からの協力は望めない。それどころかこの話を周囲にばらされたら唯一の戦力であるマシユも、戦兎を気に入っていたキャスターも自分を見限るかもしれない。

しかし、それだけで済むだろうか？ もし戦兎達が結託して自分に反旗を翻したら？ それは実行部隊を全て失うということだ。

それだけじゃない。今までうやむやに出来ていたカルデア爆破の責任も追及されるかもしれない。そうしたら誰もが自分を責め始めるだろう。

誰からも見放されて、誰からも愛されることなく、永遠に独りきりになる――

「確かに俺には所長の背負っているものが魔術においてどれだけ重要で偉大なことなのか全くわかりません」

静かな声だった。

「でも、子が親から受け継いだ仕事の大切さは俺にも分かります」

戦兎のその言葉に、オルガマリーははっとして顔を上げる。

「俺も、父さんから大切な仕事を引き継いだから」

顔を上げたオルガマリーが見たものは、あれほど酷い言いがかりをつけられたのにも関わらず、嫌な顔一つしない戦兎の笑顔だった。

— —

俺の父さんは科学者だった。それも超優秀な天才科学者で、国の宇宙開発の責任者にもなった。凄いでしょ？

父さんは俺の憧れだった。父さんと同じ科学者になることを夢見て。科学者になる自分以外を想像できないくらい、憧れていた……

でも、ある日……俺や父さんの運命を狂わせたあの事件が起きた。

父さんが主導していた宇宙開発事業が開いたイベントで、大勢の死傷者が出た。その事件は当時の誰にも想像しえなかったもの。未然に防ぐことは不可能だった。

でも、世間は誰かのせいにはいられなかった……誰もが悲しみと怒りをぶつけ

る相手を求めていた……そしてそのやり玉に挙げられたのは、父さんだった……

事件の責任者にされ、誹謗中傷にさらされた父さんは俺と母さんの前から姿を消した。何も言わずに、ただ研究資料だけを残して……

俺は父さんの無実を証明するために科学者になった。そして残された研究資料を読み解いて知った……侵略者の存在を。

世界中でただ一人、父さんだけがその存在に気づいた。そして、知ってしまった父さんはその存在を放っておくことが出来なかった。それこそが父さんが背負ってしまった使命……孤独な闘いの始まりだった。

俺はその使命を継ぐことを決めた。そのために色々と褒められないようなこともやった。そして紆余曲折あつて、俺は父さんと再会した。父さんは姿を消していた間もずっと使命を果たそうと闘っていた。

再会した俺たちは使命を果たす手前まで来たけど、使命を果たす前に父さんは命を落とした……無念だったと思う。家族から離れてまで、十年も孤独な戦いを続けてきたのに……

だから俺は改めて父さんの意思を継いで、父さんの残した使命を、最後の仕事を息子として、科学者として果たすために命を懸けて戦った。

だから、父親のやり残した仕事を果たそうとする所長の気持ちが少しは分かるつもり

です。

それがどれだけ子供にとって重荷なのかも。どれだけ大切なことなのかも……

— —

「……」

他に誰もいない静かな保健室。一つのベッドに並んで腰かけた戦兎とオルガマリーの二人。オルガマリーは戦兎の話を黙って聞いていた。

「……あなたの」

ぼつりとオルガマリーが零すように言った。

「あなたのお父様のやり残した仕事……最後はどうなったの？」

その質問に戦兎は逡巡の後、こう答えた。

「まだ途中ですかね」

それを聞いたオルガマリーは意外そうな顔をした。

「それってまだ侵略者が残っているってこと？」

「いえ、侵略者は倒しました」

オルガマリーはますます分からないといった顔をしている。侵略者の撃退こそが戦

兎の父の残した仕事ではないのか。

「確かに侵略者の撃退は父さんの最後の仕事でしたが、父さんの本当にやりたい仕事は別にあつたんです。なら、それを引き継ぐのが息子である俺のやるべきことかなって」

「……それは何？」

戦兎は少し気恥しそうに答えた。

「世界平和……かな？」

その答えに一瞬ポカンとした様子のオルガマリーだったが、すぐに嘖き出した。

「何よ、それ。随分と壮大な夢ね」

口ではそう言うものの、その声色は決して嘲るものではなかった。それまでのオルガマリーからは想像できない程、安らいだ声だ。

戦兎の話には信じがたいものだった。おまけに肝心な部分をぼかしてばかりで要領を得ない。でも、オルガマリーは不思議とその話を信じてみたくなった。論理的な証明でも、魔術でもない。もつと「心」に訴えかける何かがそうさせた。

「まあ。確かにちよつと突飛に聞こえるかもしれないませんが、紛れもなく事実です」

戦兎もまた、朗らかに言った。

「父さんは愛と平和のために科学者になって。その信念に生きて、死にました。俺はその生き方を尊敬しています……今でも」

そう言う戦兎の瞳は力強い光を灯していた。嘘つきや口だけの人間には決して宿らない光。それが戦兎の話が真実であると何よりも裏付けていた。

「……立派なお父様だったのね」

穏やかな表情でオルガマリーが呟いた。でも、戦兎にはその表情がどこか寂し気に見えた。

「所長のお父さんは、どんな人でしたか？」

突然の戦兎の質問にオルガマリーは少し戸惑った様子だった。

「無理に聞き出したいわけじゃありません。ただ、所長の話が聞きたいんです。所長は嫌がるだろうけど、俺たちは似た者同士だと思っから」

これまでのオルガマリーだったら「一緒にするな」と激怒するような言葉。しかし、今のオルガマリーには不思議と怒りは湧いてこなかった。それどころか、その言葉にどこか気持ち楽になった気さえした。

「……私のお父様は……凄い魔術師だったわ」

だから、普段なら絶対に突っぱねていたはずの戦兎の頼みをきいて、ぼつりぼつりとオルガマリーは語り出した。

お父様は、凄い魔術師だった……そうとしか表現できない。

アニムスフィア家は歴史のある由緒正しい魔術の家系で、時計塔では天体科を司るロードでもある。でもお父様の代になるまで他のロードほど力のある家ではなかった。

お父様が当主になられてからアニムスフィア家は急速に拡大していった。それまで消極的だった資産運用や研究施設の拡大に力を入れた。カルデアもほとんどお父様が一代で立ち上げた組織。

私が物心ついた時にはお父様は既に研究にかかりきりだった。言葉を交わすことはあってもお父様と一緒に過ごした時間はほとんどなかった。

でも、それはいいの。魔術師の家系では珍しくもない事。魔術師にとって魔術の研鑽こそ何よりも優先されるべきものだから。あなたは知らないでしょうけど、魔術師の家系は一族で一つの魔術の研鑽し積み上げ続ける。全ては根源の渦へと至るため。全ての魔術師の本懐である根源への到達……それを成す為になら、あらゆるものを投げうち、犠牲にしても許される。魔術師とはそういうもの。

お父様は本当に凄かった……アニムスフィア家の秘伝であるレイシフト……まだ理論しか組みあがっていないそれを完成させ、実用化にまで持って行った。必要とあれば折り合いが悪いとされるアトラス院とも協力関係を結んだ。

そうしてお父様はあらゆる障害を乗り越えてカルデアを創立した。凄いでしょ？

これは間違いなく魔術史に残る偉業なんだから。

お父様は私の誇りだった……幼いころからお父様の背中ばかり見ていた気がする。あなたと同じね。

いつの日かお父様に並んで、お父様に認めてもらうことが私の目標だった……それを思えば大変な勉強も稽古も辛くはなかった。

でも、その目標が叶うことは永遠にない。

お父様は死んでしまったから。何の前触れもなく、唐突に。

状況から見て自殺だと判断されたけど、私にはそうは思えない。あれだけ心血を注いだカルデアがようやく運転可能になった矢先に自ら命を絶つはずがない。

お父様の死の真相を調べたかったけど、アニメスフィア家の当主とカルデアの所長を一気に引き継がなければならなくなった私にそんな余裕はなかった。

満足に執務をこなせないまま一日が終わってしまう日々。その度に周りの人間は私を見て落胆して……失望して……無能と嗤った……

独りで毎日のように泣いた。助けを求めてもそんな私を嗤うばかりで、結局誰も助けはくれなかった……結局レフに出会うまで私に味方はいなかった。

――

そこまで語ったところで、オルガマリーは小さく嘆息した。

戦兎は先に見つけていたペットボトル飲料水を手渡す。オルガマリーはそれを受け取ると水を口に含んだ。

「……その、月並みな言葉ですけど……大変でしたね」

魔術師の名家がどういうものなのか戦兎には分からなかったが、いふなればオルガマリーは財閥の跡取りで、大企業の社長令嬢のようなものだろうか。親が死んで突然その仕事を受け継ぐこととなった彼女の苦労は想像できない。

「……そうね。生きた心地がしなかったわ。周りは敵だらけで味方は一人もいなかった」

「親族の方は？」

戦兎のその言葉にオルガマリーはハンと鼻を鳴らす。

「魔術師は自己中心的な人間の極みよ？ 本家の当主が死んだ途端に分家が反旗を翻すなんて当たり前。アニメスフィア家の分家もこれ幸いとばかりに本家の持っている利権を奪り取ろうとハイエナみたいに群がって来たわ」

親が死んで莫大な遺産を相続したら聞いたこともないような遠方の自称親戚が連絡を取って来た、みたいな話だなと戦兎は思った。どうやら魔術社会というものは物語のようなファンタジーなものではないらしい。

「私はそれでもお父様が心血を注いだカルデアだけは守ろうと必死だった。そしてレフ

の力を借りながら少しは執務に慣れてきた頃、カルデアの内部組織を見直している時だった……」

そこまで言ったオルガマリーはそれまで以上に顔色を悪くしている。

「私は、知ってしまったの……お父様が……お父様が……」

そこで言葉を区切り、オルガマリーは震える手でもう一口水を飲んだ。顔色は一層青白くなっている。

何度も口を開け閉めしながら話を続けようとしているが、言葉にするのも苦しいのだろう。その先がどうしても言葉にならない。

「所長……無理して話すことはありませんよ？」

「……分かってる。でも……貴方には知って欲しいの。そして、教えて欲しい……私がどうしたらいいのかを……」

そしてオルガマリーは祈るように両手を握り、眼を固く瞑ったまま言った。

「お父様は……非人道的な人体実験を繰り返し、多くの犠牲者を出した……」

口にすることも苦痛だったのだろう。オルガマリーはようやくそれだけ言葉を絞り出した。それがオルガマリーの限界だった。これ以上話すことは彼女には無理だった。

そんなオルガマリーの告白にあった人体実験という言葉。その言葉に戦慄は心臓を鷲掴みにされた気分だった。

「お父様は、正しい人だった……魔術師が倫理を語るなんてちゃんちやおかしいかもしれないけど……少なくとも私の記憶にあるお父様はそんなことをする人ではなかった……信じられなかった……信じたくなかった……」

「そしてカルデアをお父様から引き継ぐということは、その罪も引き継ぐということ……私にはそれが耐えられない……でも、カルデアを……お父様が残したものを守らなきゃいけない……」

「私はお父様が好きだった……好きだったから、どんなに苦しくてもお父様のカルデアを守ろうと頑張れた……でも、お父様は私の知ってるお父様じゃなかった……もう私には分からない……背負いきれない……頑張るのが辛くてしょうがないの……」

オルガマリーは俯いてそう言った。

戦兎は何と言葉をかけていいか分からなかった。彼女の語ったことは嘘ではないと戦兎も信じている。

しかし、だとしたら彼女はいきなり途方もない重責を背負うことになったのだ。そして覚悟を決める時間すら与えられず、追い打ちをかける様に今回のカルデアスの異常と特異点が発生した。背負いきれないという彼女の言葉は彼女の心があげる悲鳴そのものなのだ。

彼女のこの細い肩にどれだけの重責が押し掛かっているのだろう。付き合いの短い

戦兔から見てもオルガマリーは生真面目な性格であることが分かる。それゆえに彼女は「親のしたことだから自分は関係ない」などと考えられないのだろう。

付き合いの短い戦兔に彼女がここまで踏み込んだ話をしたのは、彼女と戦兔には他の人にはない「尊敬する父が死んだ」という共通点があり、かつ戦兔が魔術師でないからだ。

「どうしたらいいのか教えて欲しい」

彼女は戦兔に言った。自分と同じように、尊敬する父を失った人間はどうすればいいのかわかりたがっている。彼女は自分の歩むべき道を見失ってしまったのだ。

「所長は偉いですね」

オルガマリーが戦兔のその言葉の意味を飲み込むのに時間を要した。

「……あなた、私の話を聞いてた？」

「はい」

「……信じたの？」

「もちろん」

「……なんで私が偉いことになるの？」

オルガマリーは混乱のあまり呆けた様子だった。

「お父さんの犯した罪を投げ出さず、誤魔化さない。偉いと思います」

「俺なんて、自分の犯した罪を中々認められなくて……言い訳したり、逆ギレしたり、誰かのせいにしたりで。そりゃあもう酷いものでしたよ」

戦兎は恥ずかしそうに言った。だが、先ほどの戦兎の言葉に意外な単語が含まれていることにオルガマリーは気がついた。

「あなたの……罪？」

戦兎は少しばかり考え込んでいたが、やがてオルガマリーの方へ向きおつて言った。

「……そうですね。所長は俺を信じて話してくれたわけだし。俺も話しましょうか」

そして戦兎は自らの罪を告白した。

侵略者と戦うために侵略者の技術を研究していたこと。

そのために数多くの人体実験を繰り返したこと。

そうして得た研究成果は人間同士の戦争に利用され、さらに多くの犠牲者を出したと。

「その頃の俺は侵略者を倒すことが正義で、そのためなら多少の犠牲は仕方がないと本気で考えていました。正義という大義を振りかざして自分の犯した罪から目をそらしていた」

「そしていざ自分の犯した罪を目の前に突き付けられた時、それでも俺は目をそらそうとした。自分のせいじゃない。必要なことだった。騙された。言い訳ばかりして必

死に自分を守ろうとしてた」

「でも所長は直接自分が犯したわけじゃない親の罪から逃げなかった。だから所長は偉いって言ったんです」

偉い。

戦兎の口から出た言葉は何とも幼稚なものだった。今時の子供だってもう少し洒落た言い回しを使うと思う。

オルガマリイは名家の娘だ。他者からの賛辞は耳にタコが出来るほど聞いてきた。会ったこともない人間が聞いたこともない賛辞の言葉を送ってくる。後々辞書をめくって、よくもまあこんな言葉を知っているものだと感心することもあった。

だがそれらはただのおべっかだ。オルガマリイの機嫌を取りつつ、自分の教養をアピールする。そのための言葉だ。

戦兎の賛辞はその対極にあった。純粋にオルガマリイ自身を見ての言葉にオルガマリイは微かに震えた。

「所長は何か目標とかあるんですか？」

「目標？」

「俺は仲間のお陰で自分の罪と向き合えた。向き合えたから新しい目標を手に入れられた。だから立ち直れた。再び戦うことが出来た」

道を見失った彼女に伝えるべきは同情でも無責任な励ましでもない。新たな目標、目的こそ彼女に必要なものだ。

「俺の今の目標は科学でより良い世界を創る事。それが父さんの意思を継ぐことにもなると思うから」

「所長は何がしたいんですか？」

戦兎は真直ぐオルガマリーの瞳を見ていった。

「私の……したいこと……？」

「私はこのミッションを成功させて……カルデアスの異変を解明して……」

父の残したカルデアを引き継ぐことが私の、アニメスフィア家当主としてのオルガマリーの使命。

でもそれは私がやるべきことであって、私の本当にやりたい事じゃない。

「……いいえ。私が今、本当にやりたいことは……」

いつの間にか忘れかけていたことがあった。

「私は……お父様の死の真相が知りたい」

「お父様が何を考えていたのか知りたい。何を考えてカルデアを作ったのか……デミ・サーヴァント計画なんてものを進めてまで何をしたかったのか、それが知りたい」

「私は、お父様に近づきたい。娘として尊敬する父のことが知りたい」

親子なのに、私はお父様のことをよく知らない。何を考えていたのかも、何がしたかったのかも。でもお父様が心血を注いだカルデアを引き継げば、いつか分かるかもしれない。

そのためならば。義務ではなく、心から望むもののためならば、もう少し歯を喰いしばって立ち上げられる。前に進める気がした。

「じゃあその目標のためにも、まずはこのミッションを成功させないといけませんね」
戦兔は微笑んだ。

いつも鉛を飲み込んでいるように思い自分の体が、少し軽くなったようにオルガマリーは感じた。

特異点F 01F

前回の三つのあらすじ

- ・ 廃墟となった学校でキャンプするよ
- ・ オルガマリーが悪夢にうなされ、戦兔と父親トークで盛り上がったよ
- ・ 立った！ 兎オルガのフラグが立ったよ！

—

「お、こいつでいいか……」

校舎棟から少し離れた部室棟の一つ、野球部と書かれた部室から万丈が姿を現した。その手には使い古した金属バットが握られている。

「こんなもんでも無いよりはマシか」

万丈は手にしたバットを振り回しながら歩きだす。不良っぽい風貌の男が金属バットを振り回すという何とも世紀末な絵面だが、そもそもこの世界が世紀末状態なのであ

る意味お似合いなのかもしれない。

校庭脇の道を進む万丈の耳に何やら爆発音が聞こえてきた。何事かと音の方へ視線を向けると、校庭に見知った人影を二つ見つけた。

大盾を構えた少女と杖を携えた青年の姿。マシユとキャスターが校庭の真ん中で向かい合って何か話していた。何やら周囲に焼け焦げた跡があり、先ほどの爆発音は二人が発生源だと思われた。

「よう。何してんだ？」

「万丈さん」

「よう万丈。ちよつとした実習だよ」

そう言うとキャスターはマシユの方へと向き直る。

「一旦切り上げようぜ、嬢ちゃん」

「……はい」

「そんな顔するなって。こういうのはぶっつけ本番の方が上手くいくものだからよ」

「……はい」

マシユは何やら気落ちした様子だった。

「どうしたんだよマシユ？ キャスターにいじめられたのか？」

「人聞きの悪いこといな！」

「冗談だつて」

万丈とキャスターがお決まりのやり取りをしている間もマシユは浮かない様子だつた。

「おいおいどうした？ 何か悩み事か？」

俺でよければ相談に乗るぜ！ と意気込む万丈にマシユは少し迷つたよう様子だが、少しずつ話始めた。

「実は……宝具が発動出来ないんです」

手にした大盾をなぞりながらマシユは言った。

「宝具の使えないサーヴァントなんて欠陥品もいい所です。こんなことではマスターに顔向け出来なくて……」

悔しそうに告げるマシユの脇でフムフムと頷いていた万丈だが。

「ところで宝具つて何だ？」

何も知らずに頷いていた魔術の素人万丈の言葉に肩を落とすマシユとキャスター。

「宝具というものはですね。その英霊が持つ逸話や伝説が奇跡に昇華されたもので、宝具によっては限りなく魔法に近いものも……」

「悪い。多分分かり易く説明してくれてるだろうけど、全然分かんね」

かつて誰かが言ったような言い回しで万丈が早々に白旗を上げる。

「す、すみません！ 私の説明が分り辛くて……」

「いや、マシユは悪くねえよ。俺がもうちよつと頭がよけりや……」

「いえ！ 私がもつと分りやすい説明が出来れば……」

「いやいや俺が」

「いえいえ私が！」

「いや、長いわ！」

互いに譲らない万丈とマシユにらちが明かれないと思つたのか、ちよつと待つてろと言つてキャスターは目を閉じて何やら集中し始めた。万丈とマシユがキャスターに言われた通り大人しく待つこと十数秒。

「……これだな」

そう呟いてキャスターが目を開く。

「サーヴァントの宝具とは何か。現代の言葉でいうとずばり、必殺技だ」

「必殺技？」

「そう。大雑把に言うくと英霊が持つ有名な武器や伝説がそのサーヴァントの必殺技になるんだな、これが」

「確かにサーヴァントの宝具と必殺技はほぼイコールと言えるかもしれませんが。シンプルながら核心を付いた説明、さすがです」

キャスターの説明に感心するマシユ。

宝具とはその英霊が生前愛用していた武器、残した伝説や伝承が人々の幻想（信仰）を骨子とし奇跡（魔術・魔法）として再現されたものである。

その形状は武器であったり、スキルであったりと千差万別だが、宝具がそのサーヴァントの象徴であることは共通している。

「でもキャスターって昔の人間だったんだろ？ よく必殺技なんて言葉知ってたな？」

「サーヴァントってのは聖杯を介してある程度の知識を一瞬で学習できるんだよ。さつきは何かいい言葉がないか調べてた」

「資料で呼んだことがあります。サーヴァントの皆さんは聖杯を通してその時代の知識を学習できると。召喚された時代や場所によって言語や常識などは異なりますから、こういったバックアップ機能があるのではないかと言われています」

「つまりいつでもどこでもGOOGLE検索が出来るってことか」

「万丈さん、伏字が伏字になってないです」

マシユにツッコまれつつ、万丈ははてと首をひねる。

「じゃあキャスターにも宝具があるのか？」

「もちろんあるぜ」

「じゃあやり方を教えてやればいいじゃん」

良いアイディアだと手を叩く万丈だが、キャスターはため息をつきつつ言った。

「あのな……サーヴァントにとつて宝具つてのは最初から持つている機能みたいなものだ。本能と言つてもいい。お前も息をする時に一々肺を動かすだの、口を開くだの考えないだろ？」

そもそもサーヴァントと宝具はセットであり、宝具が何だか分からない、発動方法がわからないなどということは本来ありえない。宝具発動は教えるものでも教えられないものでもないのだ。

「私の武器が盾なので宝具も盾にまつわるものなのではと思ひ、キャスターさんの攻撃を防ぐ練習を試してみたのですが……一向に何かが発動する気配がなくて……」

「何かこう、ハンドルを回すとか、スイッチを押すとかして発動できないのか？」

万丈は必殺技と聞いて何やら少し考え込んでいたようだが、やがて腰の脇辺りでクルクルとハンドルを手回しする様な仕草を見せる。

「ハンドルにスイッチですか？」

マシユは自分の盾を裏返ししたり、逆さまにしたりと様々な角度から観察するが、当然ハンドルもスイッチも見つからない。

「いや、あるわけないだろ。機械じゃあるまいし」

律儀に自分の盾を調べるマシユにキャスターが呆れた様子で言った。更にキャス

ターが万丈の手する金属バットを指さす。

「武器と言えば万丈。お前さんが持つてるそりや何だ？」

「何って、金属バットだよ」

「聖杯から知識は得ている。それは球技の道具なんだろう？ そんなものを何に使うんだ？」

「武器に使うに決まってるだろ。他にいいもんがなかったんだ」

金属バットを武器の代わりだという万丈にキヤスターは再度呆れた表情を浮かべる。

「あのな……どこからつつこめばいいのか……」

「万丈さん……サーヴァントには神秘を纏っていない攻撃は効果がないのです。ただそのバットで殴ってもサーヴァントにダメージを与えることは出来ません」

「え!! ど、どういうことだ？」

狼狽える万丈にマシユが説明を続ける。

「サーヴァントは霊核を核とし魔力で肉体を構成しています。サーヴァントを倒すには霊核を破壊する必要がありますのですが、霊核にダメージを与えることが出来るのは神秘を纏ったものだけです。そのバットは神秘を纏っていないため、いくら殴っても効果がありません」

「??？」

よくわかっていない様子の万丈にキャストが助け舟を出す。

「つまり俺たちサーヴァントは幽霊みたいなもので、ダメージを与えるには魔力を使つたものじゃなきゃならない。そのバットを魔力で強化できればダメージは通るが、お前には出来ないだろ？」

「それにサーヴァントは人間を遥かに超えた身体能力を持っています。到底人間が太刀打ちできるものではありません。直接闘うなんて、危険なだけです」

その言葉に万丈は先に戦つたランサーを思い出した。あんなにも華奢な姿をしていたのに自分の拳が全く効かなかった。それは万丈が魔力を扱えなかったから。しかし、仮に扱えたとしてもその後のランサーの人間離れした動きを考えればすぐに返り討ちにあうことは容易に想像できた。

「じゃあ、どうすりゃいいんだよ……」

万丈が呟く。

「俺は戦兎みたいに頭がよくねえ……俺が出来るのは前で体を張る事だけなんだ。それさえ出来なくなつちまったら、俺はどうすりゃいいんだ……」

悔しそうに歯噛みする万丈。

「万丈さんが直接闘うことにはリスクしかありません。戦闘は私たちサーヴァントの役目です。皆さんは私が守ります」

マシユの言葉に納得できていない万丈にキャスターが諭した。

「万丈よ。自分の無力さが悔しいのは分かる。戦士にとってそれは屈辱以外の何物でもない」

「だがな、自分の力量を弁えて、勇猛と蛮勇を区別できてこそその戦士だ。恐れるべきは戦えないことじゃない。無意味に死ぬことを恐れろ」

「お前が戦つても無駄死にするだけだ。それは誰も望んじやいない」

万丈はそれ以上反論することはなかった。ただ俯いて手にしたバットをぎゅつと握りしめていた。

「そろそろ戦兎達と合流するか」

一人にしてやろうと思つたのか、キャスターはそう言つてマシユと連れ立つて校舎へと歩き出した。

「ドライバー……いや、せめてボトルがあれば……」

後に残された万丈は手にしたバットに視線を落としながらぼやいた。マシユらの話を聞いた後ではこのバットもまるで小枝のように頼りなく見える。

お前は無力だから後ろに下がって守られている。

マシユたちが言つたことはつまり、そう言うことだ。それは嫌味で言つたわけではない。純然たる事実として、そして万丈の身を案じての言葉だ。

頭では分つてはいる。分つてはいるが、心は、魂は納得していない。

「俺は……俺には、何が出来る……?」

— —

「作戦会議だ」

廃校同然となった学校の会議室、その中心に据えられたホワイトボードの前で戦兔が宣言する。

「敵の本拠地も近くなってきた。敵の奇襲の可能性もあることだし、落ち着いて話が出る今のうちにこれからの戦いの作戦を立てよう」

そう言つて戦兔は机に並んだ面々を見る。

出席者は戦兔を入れて6人。

万丈、オルガマリ、マシユ、キャスター、そして映像越しにロマニ。それぞれの前には戦兔が発見した飲料水が備えられており、場所と相まって、さながら職員会議のようだった。

「まず、キャスター」

「おう」

「お前の作戦を聞こう」

「おいおい。いきなり俺に聞くのか？　言い出しつぺなんだからまずは自分の作戦を言ってみろよ」

挑発気味なキヤスターの物言いにも戦兎は一切動じず、すぐさま切り返す。

「この場で敵サーヴアンの情報を一番持つているのはお前だ。ならお前が立てた作戦が一番成功率が高い」

「ま、そりゃそうだ」

キヤスターも勿体付けるつもりはないのか、すぐに自分の作戦を明かした。

「俺の立てた作戦はシンプルだ。俺がアーチャーの奴を引き付けて戦っている間に、嬢ちゃんがセイバーと戦う。そして俺がアーチャーを倒して嬢ちゃんたちと合流。二対一でセイバーを倒す」

数の優位を作って戦う。確かにそれだけ聞けば非常にシンプルだ。だが、今の説明では圧倒的に説得力が足りない。戦兎はすぐに疑問を投げた。

「なぜわざわざ二面作戦にする？　最初に全員でアーチャーを倒してからセイバーに向かえばいいんじゃないのか？」

当然の質問だな、とキヤスターが言う。

「その前に俺からも一つ聞く。この戦い、俺たちが勝てるパターンはいくつあると思う？」

キャスターのその質問にその場居る全員が答えに詰まる。そもそもその勝ちパターンを見つげるための作戦会議なのだから当然だ。

「答えは、俺とお嬢ちゃんと同時に孤立したセイバーに挑む場合のみ」。つまり勝てる可能性は一つだけだ。それ以外の状況じゃ勝ちはない」

キャスターはそう断言した。

「セイバーを倒すには防御を担当するお嬢ちゃんと攻撃を担当する俺が揃ってなきや無理だ。俺一人じゃセイバーの攻撃を凌げないし、嬢ちゃんだけじゃセイバーを倒せるだけの攻撃が出来ない」

「なら、なおさら戦力を集中して一騎ずつ倒していくべきではないの?」

オルガマリーの言葉にキャスターは、そりゃそうだと再度頷いた。

「だが、さっきも言っただろう? 俺たちの勝ちパターンは俺とお嬢ちゃんが揃っていてなおかつセイバーが孤立していること。逆に言えば向こうの負ける可能性はそれだけだ。そしてそれは向こうも気づいているだろうさ」

その場にいる全員が話を飲み込めずにいたが、戦兎だけはキャスターの言わんとして、いることが理解できたらしい。

「つまり向こうはセイバーを孤立させることは絶対はないということか?」

「そうだ。アーチャーの奴はセイバーの護衛を気取ってやがるからな。俺たちが傍にき

た時点でセイバーの傍で待機しているだろう」

「それじゃああなたの作戦も上手くいかないじゃない！」

オルガマリイの言葉にキャスターではなく、戦兔が答えた。

「でも、それ以上のメリットがあればアーチャーはセイバーの元を離れる」

「え？」

「向こうからすればマシユかキャスターのどちらかを排除できれば勝ちが確定する。こちらが二手に分かれれば誘いに乗ってくる可能性がある、ということか」

戦兔の説明にキャスターは頷いた。

「そうだ。俺の作戦は向こうにとつてもチャンスだ。アーチャーが俺を倒せればよし。そうでなくてもセイバーがお嬢ちゃんを倒せばよし。そしてセイバーがお嬢ちゃんに負ける要素はない。この作戦は向こうのリスクの方が少ないのがミソだ」

「それ以外だと乗ってこないか？」

「こないな。それ以外なら向こうは洞窟の奥で二人仲良くこつちを出迎えてくれるだろうさ」

戦兔は悩んでいた。

この中で一番戦術に精通しているのはキャスターだ。キャスター以外のメンツは物理学者（天才）、馬鹿（筋肉）、所長（魔術師）、新米サーヴァント（デミ）、医者（ヘタ

レ)であり、戦術の専門家ではない。だからこそ、自分はキャスターの作戦を支持するのが良いと言ったのだ。

しかし、キャスターの作戦はあえて敵に有利な点を作ることで相手を引掛けるというもの。敵にメリットがあるということは、それはそのままこちらのデメリットでもある。

「無視できないリスクが二つある」

戦兔は表情を曇らせながら言った。

「一つは、キャスターがアーチャーに確実に勝てるのかってことだ」

「おや？ 俺が負けると思ってるのか？」

おどけて見せるキャスターだが、戦兔の顔は強張ったままだ。

「キャスターは正面切って戦うことが苦手なんだろう？ しかもキャスターはただ勝つだけじゃ駄目だ。キャスターはアーチャーに勝った後、セイバーとも戦わなければならぬ。つまり、余力を残してアーチャーに勝たなければならぬ」

セイバーを倒すにはキャスターの攻撃力が必要。そのための余力を残してアーチャーに勝利できなければこの作戦は失敗したと同然だ。ただ勝利するよりも遥かに難易度が高いだろう。

「……ま、それについては考えてあるさ」

その点に関してはキャスターも理解しているのか、対策を考えているようだった。キャスターがそう言う以上、戦兎達は信じるしかない。

「二つ目は、マシユだ」

そう、キャスターよりもこちらの方が問題だった。最大の懸念事項と言っている。

「作戦通りならマシユは一人でセイバーを長時間相手にしなければならぬことになる。キャスターが駆け付けけるまで本場に持ちこたえられるのか……キャスターは出来ると思っっているのか？ その根拠は？」

「そうね……相手は最良と呼ばれるセイバークラスのサーヴァント。いくらマシユが防御に秀でていても、どれだけ持ちこたえられるか……」

オルガマリーも戦兎に同調した。

セイバークラスは全てのステータスが高水準であることから聖杯戦争において最良と称されるクラスである。高い膂力から繰り出される剣戟、耐魔力による防御、そして必殺の宝具。それらの猛攻にマシユが長時間耐えられるだろうか。

「……確証は無い。だが、俺は出来ると思っっている」

「なぜ？」

「あの盾だ」

キャスターは教室の後ろに立てかけてある盾を指さして言った。

「俺の勘が正しければその盾はセイバーに対して有効な武器だ」

「なぜそう思うんだ？」

「アーチャーがお嬢ちゃんを警戒しているからだ。アーチャーはお嬢ちゃんとその盾を警戒して、マスターである戦兎を真っ先に襲った。セイバーとお嬢ちゃんを合わせないために」

「……理由はそれだけか？」

「そうだ。だが、あのセイバーの護衛を気取つてめつたに動かない遊びのねえアーチャーが動くほどだ。それ自体が根拠になると俺は思う」

キャスターの話も聞いても戦兎は不安を拭えなかつた。物理学者である戦兎からしてみればキャスターの推理は根拠が曖昧で物的証拠がなく、はっきり言えばキャスターの勘でしかない。そんなものを根拠に作戦を決めていいものか。

作戦の骨子となるマッシュが倒されれば作戦は失敗。サーヴァントと戦う力を持たない戦兎達はその場で殺され、特異点の修復は不可能になる。

それゆえに作戦には可能な限り不安要素を取り除きたい。特に根拠のない予測は危険だ。

しかし、そんな戦兎の考えを見抜いていたのか、キャスターは続けざまにこう続けた。「そもそもリスクなしで倒せる程、相手は甘くねえ。むしろこっちは積極的にリスクを

背負わなければ勝機を引き寄せられない」

「俺はここがリスクの背負い所だと考える。俺たちが勝つためには避けられないリスクだ」

重苦しい静寂が会議室に満ちている。

キャスターの言うことは分かる。そもそもの戦力差が大きいこの戦いにおいて、戦兎達が勝利するにはリスクを背負う必要がある。

しかし、この作戦で最も危険で負担が大きいのはマシュだ。デミ・サーヴァントだからと言っても、ついこの間まで戦闘を経験したことのない少女に一番の重責を負わせることが戦兎には躊躇われた。

キャスターも戦兎らの葛藤が分かるのか、何も言わずに事態を見守っている。

マシュのマスターは曲がりなりにも戦兎だ。彼が決めなければマシュも動けない。

それでも戦兎は決断が下せない。もし、今手元に失った力が、ドライバーとボトルがあれば。そう思わずにはいられなかった。前に出るのが自分であれば、戸惑うことなく決断できるのに。

『所長。僕はやはりこの作戦には反対です』

この重苦しい沈黙を破ったのは戦兎ではなかった。通信の向こうから珍しくロマニがはつきりと言った。

『この作戦はあまりにリスクが大きすぎる。そしてここまでリスクを負ってなお、ようやくセイバーに勝てる可能性が出てくるだけで確実に勝てるわけじゃない』

リスクを負う必要があることはキャスターの説明で分かった。しかし、リスクに対するリターンがなさすぎるというのがロマニの意見だった。

『それよりもこの学校を拠点に防衛を固めて援軍を待つべきです。危険が過ぎるのであれば偵察に留めると所長もおっしゃったではないですか』

ロマニの言葉にオルガマリーが眉間にしわを寄せた。確かに彼女は戦兎とマシユの未熟さから特異点探索を始める時に、危険なようであれば原因調査に留め、解決は援軍を待つてから」と言った。

言ったが、本音を言えば特異点解決まで持つていきたいと思っっている。それは後々追及されるだろうカルデア爆破工作に対して反論できるだけの功績を立てておきたいからだ。

だが、死んでしまつては元も子もない。そしてオルガマリーから見てもキャスターの作戦よりもロマニの案の方が確実だと思われた。それは戦兎も同じようでオルガマリーの様子を伺っている。

「お前らがこの作戦に乗らないのであれば、俺はそれでもいい」

全員の思惑を見透かしたかのような言葉に再び全員の視線がキャスターに集まる。

「確かに援軍が当てにできるならそれを待っていた方が安全で確実だ。だがその場合、俺はまた単独行動に戻らせてもらう。お前たちと違って俺には悠長に援軍を待つている時間がないんでな」

「時間がない？」

予想外の理由に戦兔が聞き返した。

「聖杯戦争は開催期間が決まっている。開催期間である2週間の間だけ、サーヴァントは聖杯によって召喚され、現界できる。そして2週間の間に誰も聖杯を手にはできなければ勝者がいないまま聖杯戦争は終結する」

冬木の聖杯戦争はおよそ60年周期で行われてきた。そして過去の聖杯戦争において勝者が出ないまま、誰も聖杯を手にはできないまま終結したこともあったらしい。

「今日までに既に1ー1日経過している。残りあと3日の間に聖杯を手にはできなければおそらくセイバーが勝者になる。お前さんらの援軍とやらは3日の間に来れるのかい？」

『それは……無理だ。救援は要請しているけど、救援部隊の編制や移動だけでどれだけ時間がかかるか……』

ロマニは既にカルデア外部に救援信号を出しているものの、未だに反応がない。仮にあったとしても希少なレイシフト適正とマスター適正を兼ね備えた人材を集めるだけ

で相当な時間を取るだろう。そこに移動など諸々の時間を加算していけばどんなに早くとも1, 2週間は下らないことは明らかだ。

援軍を待つていたら聖杯戦争が終結してしまう。この特異点の原因が聖杯戦争にあるのなら、一番怪しいのは聖杯そのものだ。しかし聖杯戦争が終われば聖杯の調査が不可能になり、特異点解決の方法が失われる可能性もある。いや、そもそも聖杯戦争が終結した後の特異点がどうなるのかも分からない。特異点もそのまま残るのか、それともそのものが消滅するのか。その場合特異点内部の戦鬼達はどうなるのか。

特異点解決を優先するならば3日以内に聖杯をセイバーから奪う必要がある。その場合、リスクを承知でキャスターの作戦にのる必要があるだろう。

安全を優先するならば援軍を待つてこの学校に籠城することになる。ただし援軍の到着は聖杯戦争期間に間に合わず、聖杯戦争はセイバーの勝利で終わる可能性が高い。その場合、特異点そのものがどうなるのか分からない。

任務か、安全か。二つに一つ。

最終判断はカルデアトップのオルガマリーに委ねられる。カルデアのトップとしてオルガマリーは特異点解決を優先しなければならぬ。しかし、そもそも任務達成が困難だからこのような会議を行っているのだ。結局話は堂々巡りして最初に戻ってきてしまった。

すなわち、
“キャスターがアーチャーを倒して到着するまでマシユがセイバーを抑えておけるのか”

「やれます」

誰もが沈黙している中、控え目でいて、強い意志を感じさせる言葉が響く。

「キャスターさんが到着するまで、命に代えてもセイバーを抑えてみせます」

だからやらせてください。

そう、マシユの瞳が戦兔に訴えかける。

「だけどマシユ……お前、必殺技が使えないって……」

万丈が心配そうに言った。

「必殺技？」

戦兔が怪訝そうに言った。戦兔はオルガマリーと共に保健室にいたため、万丈らが校

庭で話した内容を知らないのだ。

そしてマシユたちから最初と同様の説明がなされた。すなわち、サーヴァントの持つ

宝具。そしてその宝具をマシユは発動出来ない事についてだ。

「なるほど……宝具か」

「マシユ……何でもっと早く言わなかったの？」

「すみません……」

「でも確かに……宿した英霊の正体が分からないんじゃない、その可能性は十分に考えられたわね」

マシユが宝具を発動できないことを知った戦兎とオルガマリーは難しそうに顔をしかめて言った。

宝具が使えないことは大きなデイスアドバンテージだ。サーヴァント同士の戦いにおいては宝具の撃ち合い、宝具合戦は定番と言ってもいい。特にマシユはセイバーを単騎で抑えなければならぬ。如何様な宝具かは分からないが、使えないことは深刻な問題だった。

「キャスターはマシユが宝具を使えないことを知っていてなお、この作戦を考えたのか？」

戦兎は鋭い視線をキャスターに向ける。当のキャスターは涼しい顔をして言った。

「そうだ。この問題は時間をかければ解決する問題じゃない。極限状態、ぶつつけ本番の方がかえって上手くいく」

「そんなのは論理的じゃない！」

「これは在り方の問題だ。サーヴァントにとって宝具とは本能。本能が呼び起こされるようなことが起きれば、宝具はおのずと目覚める」

「お嬢ちゃんの本能が刺激される時ってのはいつなんだろうな？ 相手を完膚なきまで

に叩き潰したいときか？ それとも……」

そう言つてキャスターは人差し指を戦兔に突き付ける。

「誰かを守るときか？」

その言葉と同時に戦兔は全身に悪寒が走つた。まるで銃口を向けられた時のような感覚。よくわからないが撃たれると戦兔は思った。

「……なんてな。冗談だよ。そう睨むなつてお嬢ちゃん」

戦兔を守るため並んでいた机をなぎ倒して前に出たマシユにキャスターは手のひらをヒラヒラと振り、何もないことをアピールする。

それを見てマシユも盾を下した。

「マスター。私たちの役目はこの特異点を解決すること。それは私にサーヴァントとしての能力を譲つた英霊の願いでもあります。やりましょう」

マシユの決意はこの場にいる誰よりも固いような気がした。それは責任感というよりも自らの役目への強いこだわりから来るように思えた。

マシユの固い決意を聞いた戦兔はオルガマリーの方へと目を向ける。オルガマリーはその視線を受けて頷いた。

「分かつた。キャスターの作戦に乗りましょう」

『所長!? 本気ですか!?!』

「仕方ないでしょう？ 私たちの目的は特異点の解決。その原因が聖杯に関係しているならその解決は聖杯戦争中でしか出来ない可能性がある。そして援軍を待っている時間はない。それならキャスターの協力が望めるうちにやるしかないでしょう」

それはそうですけど、と不安そうなロマニの声。

「だけど宝具が使えないのは問題ね……ちよつと戦兎。あなたキャスターの魔術の的になりなさい」

『「ええ!?!」』

突然のオルガマリーの提案に素つ頓狂な悲鳴をあげる戦兎とロマニ。

「マスターを守るために宝具が発動するかもしれないじゃない」

「所長……いくら何でもそれはちよつと……」

「冗談よ、さすがに」

確かに一理あるがあんまりな提案にマシユが困惑しながら反対すると、オルガマリーはすぐに薄く笑みを浮かべて冗談だと返した。

『ねえ戦兎……所長、どうしちゃったんだろう？ 所長つてあんな冗談言える人間じゃないはずなんだけどなあ……もつとこう、余裕なくてヒステリックでさ』

「ロマニ。減奉2ヶ月」

『ヒイイイ!?!』

そんなロマニとのやり取りの後、オルガマリーは再びマシユの方へ向き直って言った。

「じゃあ、宝具に名前を付けましょう」

オルガマリーの提案にキャスターを除く全員がきよとんとした表情を浮かべる。

「名前……ですか？」

「矛盾するみたいだけど、仮の真名をつけることで真名解放による宝具発動を模倣するのがよ。ルーティーンワークのように集中力を高めたり、魔力形成の助けになる」

「宝具ってやっぱり名前を叫ばないといけないのか？」

万丈の質問にキャスターが答える。

「宝具による。宝具にも色々と種類があつてな。装備型、常時発動型、スキル……形態は様々だが、多くの宝具はその真名を呼ぶことで最大の力を発揮する。一種の宣誓だな」
へえと戦兎と万丈はキャスターの説明を聞いていた。彼らにとって必殺技は自分で叫ぶものではなかつたので興味深い話であつた。

「で、肝心の名前は どうするんだ？」

「もう考えてあるわ」

何やら自信あり気にオルガマリーがほほ笑む。

『『人理の礎（ロード・カルデアス）……なんてどう？』

宝具の主であるマシユが所属する組織の名を冠し、組織の理念を体現した名前。

人類の歴史を守る力となれ。その願いの込められた名だった。

「素晴らしい名前だと思えます。私にはもつたいないくらいです」

「俺は力のあり方を示す、いい名前だと思う。使わせてもらったら？」

「……そうですね。人理の礎（ロード・カルデアス）、拜命致します」

そんな願いの込められたその名をマシユだけでなく戦兎もいたく気に入ったようだった。ただ一人万丈だけは。

「えー？ 必殺技にしては地味じゃねえ？ もつと強そうな名前にしようぜ！ 『スーパードライナミックドラゴンファイニッシュ』とかどうよ？」

などと反対したものの。

「それはない」

大体攻撃型宝具じゃなかったらどうするんだ？

サポート型宝具かもしれないのにファイニッシュとかないわ。

ていうか、馬鹿っぽくない？

バカっぽいネームは却下で。

ところで宝具って盾を使うの？

などと、ボロボロに言い負かされてスゴスゴと引き下がった。

こうしてマシユの宝具名は『人理の礎（ロード・カルデアス）』に全員一致で決まったのだった。

「ではこれよりカルデアはキャスターの作戦に協力し、セイバーを打倒。聖杯の確保を最終目標とします。出発は6時間後。それまでは自由とします。以上、解散」

— —

「よう。ちよつといいかい？」

作戦会議の後、各々が最後の自由時間を過ごす中、オルガマリーは一人で学校の屋上へと上がった。そこで彼女は集めておいた手のひら大の小石に何やら記号を刻み始める。

一つ、二つと作業を進めている中で、キャスターが彼女の元へ訪れたのだ。

「何よ？ 今忙しいんだけど」

手を止めずにオルガマリーが素っ気なく返した。

「……ほう？ 小石にルーンを刻んで簡易的な護符に……一種のエンチャントだな。お前さん、ルーン魔術も使えたんだな」

キャスターが小石の一つを拾い上げて面白そうに言った。

「んでこれは……ちよつとした衝撃で発動するように組んである……なるほどねえ。これなら魔術の使えない戦兎達でも使えるな？」

「別に。何だつていいでしょ？」

「照れんでもいいだろ？ いい上司じゃねえか」

カラカラとキヤスターが笑う。オルガマリーはフンと鼻息を荒くしながら小石を積み上げていった。

「お？ こつちのは違う術式だな……ほう？ 衝撃を与えると光と音が出るのか」

「ちよつと！ あんまりいじらないでくれる？ あなたの魔力にあてられて暴発するかもしれないでしょう？」

「そんなヘマはしねえよ。それにこの術式もよく出来てるし、暴発もしないだろ」

「それはどうも。ルーンの元祖に褒めてもらえるなんて光栄ね」

作業をする手を止めることなくオルガマリーは小石に魔術式を刻んでいく。その手際はルーン魔術の使い手であるキヤスターから見ても中々の腕前だった。

「しかし……お前さんも不思議な奴だな」

キヤスターはしげしげとオルガマリーを見ていった。

「魔術の腕前も魔術回路も一級品なのに、マスター適正だけないなんて。何かの呪いかい？」

「……用が済んだのなら帰ってくれる？」

どうやらこの話題はタブーみたいだなと、あからさまに機嫌が悪くなったオルガマリーを見てキャスターは思った。

「用はちゃんとある。セイバーの件だ」

「それならさつき散々話し合っただでしょう？」

「あの場では言わなかった情報がある……セイバーの正体とかな」

その言葉にオルガマリーの表情が凍り付く。

「セイバーの真名を知っているの!？」

「ああ……奴の宝具を見れば、誰でもその正体に行き着く」

キャスターの脳裏にはかつて見たセイバーの宝具が焼き付いている。セイバーが聖杯戦争を続行し、再開の狼煙代わりとでも言わんばかりにバーサーカーをその宝具を持って滅したのだ。

「王を選定する黄金の剣……その二振り目。星の光を束ねるとされる、おそらく最も名が知れた聖剣」

「エクスカリバー。それが奴の宝具だ」

その名を聞いた瞬間、オルガマリーの表情は凍り付いた。

「っ!? エクスカリバーということは……そのセイバーは……」

「そう。騎士の王と誉れ高いアーサー王だ」

なんてこと、とオルガマリーは呟いた。

「もしそうだとしたら最高レベルのセイバーじゃないの……こんな大事な情報をなぜ作戦会議で言わなかったの!？」

アーサー王はブリテン、今のイングランド地方発祥の騎士の英雄譚、その主人公だ。全世界で今も親しまれる物語の数々によつて知名度は神話の神々にも匹敵する。当然、そのアーサー王のサーヴァントとなれば、その能力は最高レベルになるだろう。

「告げなかった一番の理由はお嬢ちゃんを気負わせないためだ」

「マシユを?」

「アーサー王に所縁のある盾の逸話を持つ者、それも英霊になればそうなヤツとなればそれなりに絞り込める。現にお前さんもいくつか心当たりがあるんじゃないかねえか?」

「……そうね。ならマシユに――」

オルガマリーが自分の思いつく限りの候補をマシユに伝えようとすると、キャスターがそれに待ったをかける。

「それがよくないから、俺はこの話題に触れなかった」

「……どういふこと?」

「何度も言っているが、宝具とはサーヴァントの本能だ。宝具はサーヴァントの本能に

よつてのみ解放される。極論だが、その者の真名や正体は宝具発動には一切関係ない」
「そして下手に自分の源である英霊の正体を意識すると、かえつて本能の解放を妨げる恐れがある。あの英霊ならこうあるべき、ああしなきやなんて考えは邪魔なだけだ。お嬢ちゃんは自分自身の内側に目を向けなきやならねえ」

マシユに思い込みや先入観を持たせてはならないと、キャスターは言った。

「……なら、なぜ私に教えたの？ 私がこつそりマシユに教えるかもしれないわよ？」

「お前さんが唯一の魔術師で、あいつらの上司だからな。一応、筋は通しておかねえと。それに、戦兎達に礼装を作つてやる姿を見て確信した。お前さんはあいつらに必要なものが何なのか考えられる奴だつてな」

サーヴァントとはいえ、他人にこうも褒められると、嬉しいやら恥ずかしいやらでオルガマリーは背中がむず痒い思いだった。

「ところでよ……お前さん、戦兎と寝た？」

「……………はあ!？」

だが次の瞬間、キャスターの言葉にオルガマリーは思わず叫んでしまった。

「な、何でそうなるのよ!？」

「いや、だつてなあ……今のお前さんはこの学校に来る前と比べて大分雰囲気丸くなったっていうか、明るくなったからよ」

「それが何で戦兎にだ、抱かれたことになるの!？」

顔を真っ赤にして慌てるオルガマリィ。魔術師の癖に初心な奴だなとキャスターは思った。

「だつてお前さんら、この学校の寝室で長い間二人きりだったじゃねえか。若い男女が寝室で長時間二人きりなんてそれしかないだろ？」

保健室での一件を言っているらしいキャスターの言い分に声にならない言葉をパクパクと発し続けるオルガマリィ。

「あー！ 安心しろよ？ 覗きなんて野暮なことはしてねえ。逆に人払いの結果を貼つてやっただぜ。おかげであの通信先の軟弱男も何があつたのか把握してねえはずだ」

とてもいい笑顔でグツと親指を立てるキャスター。

「いい加減にして！ あなたが考えているようなことは一切ないから！ 私たちはちよつとした身の上話をしていただけなんだから！」

あの時はちよつと弱気になつていただけで普段はあんなことはないんだから確かに今まで私個人を見て話をしてくれる同年代はいなかったからちよつとは嬉しかったけどでも私とあいつじゃ立場が違いすぎるしああでもお父様の話を聞いてくれて嬉しかったなあ私たち共通点があつたから話し易かつたし共感出来て気持ちがあつたのは本ただけだからと言つて私があいつに惚れるなんてことは絶対にありえないか

ら勘違いしないでよ大体――

「お、おい！ 分ったから落ち着けて！」

凄いい勢いでまくしたてるオルガマリーにたじろぐキャスター。

「とにかく！ 私と戦兎はそういう関係じゃないから！」

「分かつたよ！ 俺が悪かつたって！」

口では謝りつつ、*「なんでえつまんねえの」*などとボヤクキャスター。

「大体貴方ね……貴方の生きていた時代ならともかく。現代で女性にそんな話をしたらセクハラって言う犯罪になるんだからね！」

「マジかよ!? 窮屈な世の中になつたもんだなあ……」

自分が生きた時代と現代の貞操観念の違いにキャスターは目を丸くした。

「まあ事の真偽は置いておくとして」

「ないから！ 絶対ないから!!」

「このメンツじゃお前さんが一番危なつかしかったからよ。気になつていたんだが、この調子なら大丈夫そうだな」

「私が？ 戦兎や万丈龍我の方がよっぽど危険だと思ふけれど。知識と自衛手段を持っている私と違って、マシユに頼る以外に彼らに身を守る術はないのだから」

オルガマリーには豊富な魔術知識と不得手ではあるものの攻撃用の魔術も身に着け

ている。知識もない、魔術も使えない戦兎と万丈と比較して例えるなら、一般人と武装した軍人位に差があると言ってもいい。

「危なっかしいってのはそういう意味じゃねえよ。何っーか……余裕？ 戦場で真先に死ぬのは追いつめられて動けなくなった奴だからな」

肉体的であれ、精神的であれ人間は追いつめられると固まってしまふ。体が強張り、思考が止まり、何もできなくなつたものは一瞬の判断が生死を分ける戦場では生き延びられない。

「戦兎と万丈は確かに魔術師としては素人以下だが……おそらく少なくとも修羅場をくぐってきているはずだ。だからあいつらはこの異常事態でも落ち着いている」

「修羅場……?」

オルガマリーの頭に戦兎の語つた過去に出てきた「侵略者」という言葉が連想される。

「その点、お前さんは余裕なんて欠片もなくて。初めて見た時から「あ、こいつ絶対早死にするわ」って思つたもんだが……」

「ちよつと!?!」

「この様子なら、心配なさそうだな」

この短い間に何があつたのか、オルガマリーの雰囲気は随分と明るくなつた。気持ち

が前向きになったことで活力と彼女本来の聡明さが戻って来たのだ。

もつとも、短期間でがらりと雰囲気が変わったからこそ、キャスターは所謂「男女の関係」があつたのではないかと疑っているのだが。そこらの感性はやはり古い時代に生きたもの。今とは違う貞操観念の持ち主だつた。

「何はともあれ、明日は決戦だ。何が起こつても最後まで諦めるな。諦めなければ、何か起こるもんだからな」

「何よそれ。精神論で上手くいけば苦勞はないわ」

「いやいや。これは三日三晩戦場で粘つた実体験からの助言だ。覚えておいて損はないぜ」

他ならぬ英霊の言うことならば、きつとそうなのだろう。オルガマリーはキャスターの言葉を頭の隅っこに留めると作業に戻つた。

全ては明日決まる。

何としてもこの異変を解決して、そして歩み出すのだ。新たな自分の目標に向かつて。自分の願いを叶えるために。